

カール・リッターの地理学思想

手 塚 章

- | | |
|----------------|-----------------------|
| I はじめに | III-1 リッター地理学の評価と研究 |
| II リッターの生涯 | III-2 主要な著作 |
| II-1 生い立ちと思想形成 | 資料-1 「一般比較地理学の試みへの序説」 |
| II-2 ベルリン大学時代 | 資料-2 「地理学における歴史的要素」 |
| III リッターの業績 | |

I はじめに

カール・リッターといえば、アレクサンダー・フォン・フンボルトと並んで、近代地理学の建設者として、世界中にその名が知られている。リッター没後、すでに百年以上の歳月をへた現在でも、リッター地理学のもつ今日的意義は、ドイツばかりでなく、世界の各国でしばしば強調されてきた¹⁾。しかし、その影響力の大きさや偉大な地理学者としての名声にもかかわらず、現在の地理学界において、リッターは「知られざる」地理学者といわねばならない。このような状況は、リッターを生み出した当のドイツにも、ある程度あてはまる。地理学史家であるベックは、リッター地理学に対する「かつての生き生きとした称賛と、彼の業績に対する現在のあやふやな理解の間には、きわめて深い溝がある」と嘆いている²⁾。

わが国について言えば、リッターの地理学思想に対して、かつて「生き生きとした称賛」が寄せられたとは思えないが、少なくともリッター地理学に関心を抱き、原典に直接あたった研究者が少なからず存在した³⁾。しかし、残念なことに、リッター自身の言葉や文章については、たんに片言隻句が引用されるだけで、まとまった文章の翻訳はこれまで全く試みられていない。このような状況を少しでも改善するために、本稿では、リッターの代表的な文章を訳出し、資料として末尾に掲載した。本稿の前半は、それらの文章を味わう参考に、リッターの生涯と業績のあらましを述べたものである。

わが国のみならず、リッターの著作は、フンボルトに較べて、ドイツ語以外への翻訳例がきわめて限られている。これは、国外における両者の知名度の違いにもよるが、とりわけリッターのドイツ語の難解さが、外国人にとって大きな障害であったことを反映している。書簡や日記を別にすると、リッターの学術的な著作には、当のドイツ人にとっても論旨が不分明で曖昧な文章が多い⁴⁾。本稿に掲載した文章にしても、一読しただけでは意味が通せず、まるで暗号を解読しているような気分させられた段落がいくつもある。「深遠な思想家という評価をえるための一つの方法は、曖昧な文章を書くことである」⁵⁾という愚痴とも冗談ともとれる言葉が、リッターについて言われるのは、彼の文体がきわめて難解であることをよく表している。

翻訳の技術的な困難さとは対照的に、まず何を訳出すべきかという問題に関しては、大方の合意が存在する。フンボルトに較べると、リッターには、地理学の本質や方法について系統的に論を展開した文章がいくつも見られる。これらの文章を、リッターみずから手で集成した『一般比較地理学序説』(1852年)は、地理学に関する彼の基本理念を理解するうえで、まず第一に参照せねばならない文献だからである⁶⁾。この著作には、リッターのライフワーク『地理学』(1817-59年)に付された序論と、ベルリン王立科学アカデミーの紀要に掲載された5編の論文が収録されている。本稿では、前者の冒頭部分と、後者のうち最も有名な論文「地理学における歴史的要素」を訳出した。

もちろん、これらの文章に、リッターの全業績が圧縮されているわけではない。方法論的な考察と、大著『地理学』で展開された学問的ないとなみとの間には、かなりの隔たりが存在するように思われる。したがって、『一般比較地理学序説』にみられる地理学思想でリッターを判断すること、ましてや、その一部をもって彼の全地理学を論じることは、短見のそしりを免れないことを、最初にお断りしておきたい。

リッターの翻訳が比較的まれな中で、『一般比較地理学序説』には、これまで英語とフランス語の二種類の訳本が存在してきた⁷⁾。本稿での日本語訳にあたっては、これらのうちフランス語訳を参考にした。英語訳とは対照的に、このフランス語訳は、難解なドイツ語をかなり明解なフランス語に置きかえており、文章の意味を理解するうえで大変参考になった。しかし、原文に忠実とは言いかねる箇所も多く、また文章を明解にするために、原文中にみられる語句をしばしば省略して訳出している。これに対して、本稿では、原則として語句の省略はしていない。ただし、非常に長い文については、原文の意味を変えないように、いくつかの文に区切って訳出した場合が多い。

本稿で訳出したのは、『一般比較地理学序説』のうち、分量にして6分の1弱にすぎない。残りの部分を含めて、原著の全訳が望ましいことは、いまさら言うまでもあるまい。これについては、かなり先になるだろうが、他日を期したいと思う。

原典の翻訳がまったく欠けていたのに較べると、リッターの地理学思想に関する著述は、わが国にも数多くみられる。リッターの地理学思想をもっとも詳細に論じたのは、野間三郎であろう⁸⁾。しかし、そこでの考察は、リッター自身の著作というよりも、むしろ後世の学者によるリッター研究に、主として基づいていた。これに対して、岩田慶治は、リッターの著作(とりわけ『一般比較地理学序説』)を、直接検討した論文を発表している⁹⁾。また、水津一郎は、リッターの手になる書簡を一部訳出している¹⁰⁾。同様に、村関信男は、リッターの書簡を手がかりにして、彼の地理教育思想を論じた¹¹⁾。たしかに、リッターは、学者であると同時に、生涯を通じて熱心な教育者でもあった。本稿では、地理学者としてのリッターに焦点を合わせたが、教育者(あるいは地理教育家)としての業績も、リッター地理学の重要な側面である。この点については、別稿で検討することにした。

また、リッターの生涯と業績のあらましに関しても、わが国には簡潔な紹介文がいくつか存在する¹²⁾。本稿の前半は、これらの著述と重複するところが多い。フンボルトについての拙稿¹³⁾でも述べたように、ここでの筆者の意図は、たんにリッターの生涯と業績に関する基本的な事実と論点を整理することである。ただ、その際に、ドイツを中心とする従来の一時的な研究文献を、近年のものま

で含めて、できるだけ丹念に紹介するように努めた。

II リッターの生涯

リッターの生涯については、義弟のクラマーによって、日記や書簡を中心にきわめて詳細な伝記が編まれている¹⁴⁾。近年、ベックの手で、リッターの生涯が比較的詳しく紹介されたが、その内容のほとんどは、このクラマーの伝記によっている¹⁵⁾。リッターの伝記的事実に関しては、長短とりまぜて数多くの文章が存在するが、もとをたどるとクラマーの伝記を一次資料にしているものが多い¹⁶⁾。以下では、これらの文章を参考にしながら、リッターの生涯のあらましを手短かに紹介しておきたい。

II-1 生い立ちと思想形成

カール・リッターは、1779年8月7日に中部ドイツの小都市クベトリンブルクで生まれた。父親は医師で、1772年以来、クベトリンブルクの女子修道院長アンナ＝アマリエの侍医をつとめていた。アンナ＝アマリエは、プロシア国王フリードリヒ2世(大王)の妹にあたる。当然、リッターの父親は町の名士であり、カールは恵まれた星のもとに誕生したわけである。リッター家には6人の子供(うち5人は男子)が生まれ、カールは3男であった。

フンボルトと同じく、リッターも幼くして父親を亡くしている(1784年、リッター4歳)。しかし、財産に恵まれたフンボルト家とは異なり、働き手を失ったリッター家は、たちまち経済的な苦境に直面せざるをえなかった。カールは、5歳から17歳までの11年あまりの歳月を、著名な教育家ザルツマンの学園ですごしたが、これもリッター家の経済的な苦境がもたらした結果といえる。当時、ザルツマンはシュネッフェンタールに学園を設立したばかりで、才能に恵まれたリッターを学費免除の特待生として招いたのである。ザルツマンの決断によって、カールの兄ヨハネスとリッター家の家庭教師グーツ＝ムーツもシュネッフェンタールの学園に招かれた。かくして、ザルツマンは、後世この学園に最大の名誉をもたらした生徒と教師を、同時に受け入れたことになる。

リッターは、この学園で早いころから地理学に対する関心を深めたようである。また、自己の進路についても、学業をつづけ、将来的には教育者になるという希望を抱いていた。しかし、これに対しては、ザルツマンの反対や親の意向もあって、その希望の実現はおぼつかない状況であった。フランクフルトの銀行家ホルベークとの出会いが、このような状況を転換させた。疎開先のゴータでたまたまりッターを紹介されたホルベークは、当時まだ幼かった二人の息子の家庭教師として、この15歳の少年に目をつけたのである。彼は、ホルベーク家の家庭教師になることを条件に、リッターに対して大学進学に必要な学資の提供を申し出た。

1796年の11月に、リッターはハーレ大学に登録した。ホルベーク家の家庭教師としてフランクフルトにおもむく1798年10月までの2年間、リッターはここで様々な分野の勉学に没頭することになる。その後、1798年から1813年までの15年間は、リッターの家庭教師時代である。この時期は、リッターにとって19歳～33歳にあたり、彼の地理学思想や教育観の形成にきわめて重要な意味をもっている。

た¹⁷⁾。

ホルベーク家は、フランクフルトでも指折りの名家であった。当主のホルベーク氏は、町で最も有力なベートマン商会の経営者であった。また、ホルベーク夫人は、このベートマン家の出身であり、夫人の母親は、その家柄と人柄があいまって「フランクフルトのファーストレディー」とみなされていた。ホルベーク家には4人の子供がおり、このうちフィリップとアウグストの2人兄弟の教育がリッターに委ねられた。リッターは、ザルツマン流の新しい教育方法を実践するとともに、町の上流家庭にいる教師たちと交流を深めながら、この教育者としての使命に没頭した。

リッターに対するホルベーク夫妻の信頼が深まり、ホルベーク家におけるリッターの重みが増すにつれて、彼の社会的活躍の場は、しだいに広がっていった。家庭教師としてのリッターは、すでにフランクフルトの有名人だったといえる。地理学あるいは地理教育に関する研究も、この間、着実に進められた。1804/1807年に刊行された『ヨーロッパ(全2巻)』と、これに付随する6葉の地図集は、リッターが地理学者として世に問うた最初の作品である。

しかし、リッターの知的興味は、地理学ばかりに向けられていたわけではない。教育問題に対する関心は、この時期を通じて、つねに一貫していた。1807年のスイス旅行のおりには、著名な教育者ペスタロッチをイベルドンに訪ねて、1週間にわたり滞在している。イベルドンには、その後も1809年と1811年にそれぞれ訪ねており、ペスタロッチ思想に対するリッターの関心の深さを物語っている。

また、フランクフルト時代のリッターに学問的な面で最大の影響を与えた人物として、伝記作者のクラマーは、上述のペスタロッチと解剖学者のゼメリンク、博物学者のエーベルの3人をあげている¹⁸⁾。このうち、とくにエーベルは、リッターの地理学思想に直接的な影響をおよぼした人物として重要である。この他、アレクサンダー・フォン・フンボルトや地質学者のレオポルド・フォン・ブッフなど、当時の一流の学者たちからも、リッターは直接的な影響をこうむっている。ちなみに、リッターが初めてフンボルトに出会ったのは、1807年の冬のことである。ベルリンからパリに向かう途上、フンボルトはフランクフルトに立ち寄り、数週間滞在したのである。その時の印象を記したグーツ＝ムーツへの手紙には、フンボルトの業績に対する称賛の気持ちがはっきり表れている¹⁹⁾。

この時期のリッターは、知的刺激にみちた環境に恵まれるとともに、時間的にもかなりの余裕をもっていた。当時のドイツで、フランクフルト以外の都市では、このような学問環境を期待することは困難であったろうし、また、家庭教師以外の職業では、勉学にこれほど好都合ではなかっただろう。そのような意味で、リッターは、ここでも幸運に恵まれていたといえる。

1810年代に入ると、家庭教師としてのリッターの仕事は、ほぼ終わりに近づいていた。すでに長男のフィリップは、ホルベーク氏の死去(1808年)にともない、父親の跡をついで銀行家の道を歩みはじめていた。次男のアウグストと、ゼメリンクの息子ウィルヘルムの2人が、リッターに残された生徒たちであったが、二人ともすでに10代の後半に達していた。したがって、1811年から1812年にかけてのジュネーブ滞在と、1812年から1813年にかけてのイタリア旅行は、まさに家庭教師時代の締めくくりであった。

イタリアから帰国したリッターは、ホルベーク未亡人の希望を容れて、アウグストとともにゲッティ

ンゲン大学の門をくぐった。その後、アウグストは1815年にベルリン大学へ移ったが、リッターはゲッティンゲンにとどまって、ひきつづき勉学と著述に没頭した。フランクフルトのギムナジウムに赴任するまでの6年間、リッターは仕事や義務からほとんど解放されて、もっぱら自分自身の研究テーマに集中することができた。地理学者としてのリッターの名声を確立した『地理学（第1版）』は、このゲッティンゲン時代に生み出されたものである。

地理学に関する包括的著作の構想は、かなり以前からリッターの心のうちに温められてきた。大学図書館の豊富な蔵書、学問に専念できる静穏な環境、一日のほとんどを思索と著述にあてられるフリーな研究者としての立場、これらの条件があいまって、リッターは、この大著の構想をいよいよ実現しようと決意したのである。リッターみずからに語らせよう。彼は、1815年夏の（ゼメリンク宛の）手紙で次のように書いている。「このところ私は、かつて構想していた著作に全力で取り組んでいます。従来のもよりは、おそらく幾分ましなものが書けるでしょう。この著作で、私はいささか無謀な企て、すなわち包括的な結論を確保するために既存の研究をすべて活用しようとしておりますので、中途半端にならないように、この冬も図書館にこもらねばなりません。この仕事が終わるまで、ゲッティンゲンを離れられなくなりました。（中略）わが一般自然地理学の本質は、（比較解剖学と同じ意味において）比較地理学であること、また、無機的自然と有機的自然、そして民族の歴史の相互的な関係を明らかにしようとする点にあります。これまで長い間ぐずぐずしてきましたが、その間の試行錯誤やブルーメンバッハ、ハウスマン両氏の助言などにより、私の構想はたんに改善されただけではなく、まったく新しい姿をとるにいたりました。それが、明確な領域をそなえた一つの学問分野であること、また、他の分野と肩をならべて自立的な学問分野であることを示せるだろうと確信しています」²⁰⁾。

『地理学』の第1巻は、1817年の夏に刊行された。地表とその住民に関する新しいスタイルの考察は、すぐに注目を集め、全体として好意的な評価が与えられた。翌1818年には第2巻が続いた。リッター自身の構想によれば、『地理学』は全4巻で完結するはずであったが、結局のところ、第3巻以降は出ることなしに終わっている。ちなみに、第1巻では、序論に続いてアフリカと東アジアがあつかわれており、第2巻ではアジアの西部が考察されている。

1819年の4月に、リッターはゲッティンゲンを離れてフランクフルトに向かった。ギムナジウムで歴史／地理教師の職を得たためである。また、同年の秋には、ゲッティンゲン時代に知りあったリリー・クラマーと結婚している。この時、リッターは40歳、花嫁は24歳であった。フランクフルトでの生活は長く続かなかった。ベルリンの士官学校と大学から招かれたからである。ベルリンに移ったのは、翌1820年の9月。以後、1859年に亡くなるまでの約40年間、リッターは、ベルリン大学の地理学教授として、ドイツのみならず世界中にその名声をとどろかせた。

II-2 ベルリン大学時代

ベルリン時代のリッターは、研究を別にすれば、士官学校での授業とベルリン大学における講義を主要な仕事にしていた。このうち、前者での授業は当初から大成功をおさめ、モルトケやローンを

はじめとして、軍人のなかに多数のリッター崇拜者を生み出した。クラマーのリッター伝には、士官学校での授業内容のあらましが付録として掲載されているが²¹⁾、それを見ると、導入部で簡潔な概論を述べたのちに、授業時間の大半がヨーロッパ地誌にあてられている。リッターの受け持ちは、当初週4時間で1年間のコースであったが、内容の充実をめざすリッターの希望が受け入れられて、1827年からは週4時間で2年続きの授業に延長された。

限られた聴衆を相手に毎年同じテーマの授業を繰り返す士官学校に較べると、ベルリン大学でのリッターの講義題目は、きわめてバラエティーに富んでいた。毎冬学期に開講される「一般地理学」は、着任した頃の頃こそ聴講者が少なかったものの、やがて三百人から四百人がつめかける人気授業の一つになった。このほかにも、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどの大陸別地誌；古代パレスチナ、ギリシア、イタリアなどの地誌；さらには地理的探検の歴史などが、頻繁にというわけではないが、随時開講された。

員外教授であったリッターが正教授のポストについたのは、1825年のことである。1828年には、ベルリン地理学協会が創立されたが、リッターはここでも初代会長に選出されている。このように、1859年に死亡するまで、リッターは、ドイツの地理学界でまさに中心的な役割を果たし続けた。また、19世紀のこの時期に地理学講座が確立していたのは、世界でもベルリン大学のみであったため、リッターは世界の地理学界の中心人物でもあったわけである。このことは、ルクリュ（フランス）やギョー（スイス）やセミョーノフ＝チャンシンスキー（ロシア）などといった人々が、ベルリンに留学してリッターの講義を聞き、その後、それぞれの国（ギョーの場合はアメリカ合衆国）で地理学の発展に大きな役割を果たしたことにも表れている。

このように、ベルリン時代のリッターは、ホルベーク家の家庭教師をしていたフランクフルト時代と同様に、熱心で誠実な教育者であり続けた。しかし、この時期におけるリッターの活動のもう一つの軸は、ライフワークともいえる大著『地理学』の執筆にあった。リッターは、1818年に第2巻を刊行したのち、続巻の執筆を放棄して、新しく改定版の執筆にとりかかった。この改定第2版は、第1版に較べると記述の内容が大幅に増補され、単一の著者による地理学書としては、おそらくルクリュの『世界地理(全19巻)』をしのいで、古今未曾有の大作といえるであろう。しかも、リッターの『地理学』は未完の大著であり、この第2版にしても、第1版と同様に、アフリカとアジアの部分のみで終わっている。これは、当初の構想からいえば、ようやく予定の半ばに近づいた程でしかない。

『地理学(第2版)』(全21分冊)の構成については、次節で詳しく述べることにしたい。ここでは、改定第2版の第1分冊(1822年)と第2分冊(1832年)の刊行年に10年の開きがあること、また、第2分冊以降は毎年ほぼ1冊のペースで、きわめてコンスタントに出版され続けたことを指摘しておく。

最後に、ベルリン時代におけるリッターの旅行歴について触れておきたい。リッターについては、フンボルトとの比較から、しばしば書齋地理学者（英語流の表現では安楽椅子地理学者）というレッテルが貼られてきた。しかし、『地理学(第2版)』において、アジアの次にヨーロッパを予定していたリッターは、執筆の準備作業の一環として、頻繁にヨーロッパの各地を旅行している²²⁾。1824年

には、オランダからパリに足をのばし、そこで2か月ほど滞在して、フンボルトに面会している。リッターの足跡は、ヨーロッパのほぼ全域におよんでいる。現在の国名でいうと、西はイギリスやアイルランド、北はデンマークやスウェーデンやノルウェー、南はスペインやイタリアやギリシア、東はポーランドやルーマニアやブルガリアなどといった具合である²³⁾。ただし、大著『地理学』の主たる考察対象であったアジアに関しては、小アジア半島の都市イズミルを短期間訪れたのみで、また、アフリカには、まったく足を踏み入れていない。したがって、研究方法という点では、ゲッティンゲン大学の図書館にこもって生み出された『地理学（第1版）』と同じように、リッターは終生変わることなく文献研究のスタイルを踏襲しつづけた。

1832年以降のリッターが、『地理学（第2版）』の執筆に全力を投入し、短いインターバルで次々に巻を重ねていったことは、すでに述べた。結果的に最後の巻になった第21分冊は、リッターが死去した1859年に刊行された。各巻1,000ページ前後におよぶ著作を、30年に満たない期間で20冊書き上げたことになる。フンボルト死去の知らせが届いたのは、1859年の5月であるが、それから間もなくしてリッターも病の床についた。80歳を越えたばかりのリッターが、最後の息をひきとったのは、1859年9月28日の午前10時のことである。埋葬式は10月1日に行われ、妻（1840年死去）の横でリッターは永遠の眠りにつくことになった。

Ⅲ リッターの業績

Ⅲ-1 リッター地理学の評価と研究

リッターを論じた文章は、枚挙にいとまのないほど数多く存在する²⁴⁾。すでに19世紀の前半から、リッターは、新しい地理学の建設者とみなされてきた。リッター自身の表現を借りると、従来の便覧（ハンドブック）地理学を脱却して、科学としての地理学を組み立てたというわけである。したがって、その後の地理学者たちは、みずからの地理学理論を展開するときに、大なり小なりリッターの考え方を意識せざるをえなかった。地理学に対する異なった見方は、これまでしばしば、リッター地理学に対する評価の違いとして表現されてきた²⁵⁾。その意味で、地理学者からつねに高い評価をかちえてきたフンボルトとは対照的に、リッターの場合、称賛の言葉と厳しい批判とが、どの時代においても交錯している²⁶⁾。

ベルリン大学時代のリッターは、ドイツ国内はもちろん、世界中から高い評価をえていたが、この時期においても批判者がまったく存在しなかったわけではない。1830年代の前半にたたかわされたリッターとフレーベルの論争は、レーリーやベックの紹介でよく知られている²⁷⁾。しかし、フレーベルの批判は、リッターの名声にほとんど影響を与えなかった。これに対して、リッターの死後、ペシエルによって加えられた攻撃は、その後のリッター評価に大きな影響をおよぼした。ペシエルは、フレーベルと同様に、リッター地理学の目的論的性格を厳しく批判したのである²⁸⁾。

他方、リッターを積極的に擁護した地理学者としては、ラッツェルがあげられる。彼は、リッターの生誕百周年に際して、その生涯と業績をかなり詳細に検討しているが²⁹⁾、その中でラッツェルは、ペシエルとは反対に、リッターの価値を再認識することこそが、当時の地理学にとって重要な課題で

あると論じた。ちなみに、ラッツェルの弟子たちには、リッター研究を学位論文にしたものが何人も存在する。また、ラッツェルの地理学理論には、リッターの影響が強く認められる³⁰⁾。

19世紀の末から20世紀の初めにかけては、ドイツを中心として近代地理学の基本理念が活発に模索された時期であった。このような流れの中で、近代地理学の源流とみなされたリッターは、多くの地理学者の議論と研究の対象になった。上述のベシエルとラッツェルは、それらのうちで最も大きな影響をおよぼした学者といえる。しかし、影響力の大小を別にすれば、リッターの地理学思想と本格的に取り組んだ研究としては、彼らのほかに、マルテやワグナーやヴィゾツキーの論文を見のがすわけにはいかない³¹⁾。むしろ、後者においてこそ、リッターの地理学思想がより正確に考察されていると思われるからである³²⁾。

第2次世界大戦後にも、重要な研究がいくつか存在する。シュミットヘンナーの『カール・リッター研究』は、長年にわたる調査と思索の集大成であり、リッターに関する包括的な研究として、現代の地理学者に基本的なリッター像を提示している³³⁾。また、リッター没後百周年にあたる1959年には、フランクフルト時代を中心に、リッターの地理学思想形成についてプレーベが新しい視点を提出し、リッター研究に大きな刺激をもたらした³⁴⁾。さらに、生誕二百周年にあたる1979年には、地理学史家のベックがリッターに関する研究書を公刊し、比較的詳細な伝記とともに、主著『地理学』について細部にわたる紹介と分析を試みている³⁵⁾。ちなみに、その中でベックは、『地理学』の構想がペスタロッチ思想をそのまま反映しているとするプレーベの見解に対して、明確な反対意見を展開している³⁶⁾。

しかし、今世紀を通じて、リッターに対する関心は、これら一部の研究者をのぞくと、ドイツにおいても比較的乏しかったようである。リッターのドイツ語はきわめて難解であり、また、主著『地理学』はあまりに大部であった。さらに、リッターの著作に対しては、ベシエル以来つねに目的論的というレッテルがはられ、宗教的なイメージがつきまとった。ヘットナーの次のような記述は、この種の見方をよく示している。「リッターは、深く宗教的な性格をもち、世界のあらゆることに神の手を認めた。(中略)また彼は、地球を人類の学校とみなし、そこでは人類の歴史が前もって定められたコースにしたがって展開するとした。(中略)リッターの考察態度は自然哲学的であり目的論的であった。それは味気ない因果論的考察方法にくらべ、宗教上および倫理上の要請にかなったものであった。そしてこのことが、リッターの与えた影響力の大きさを学問の進歩以外の面によく説明してくれる。しかし、この種の目的論的考察は科学的に不毛であり、科学の進歩に貢献する能力を欠いていた」³⁷⁾。ヘットナー自身は、それ以外の点でリッターの地理学思想を高く評価していたが、このような見方が地理学の研究者をリッターの著作から遠ざける結果をもたらしたことは否定できない。

リッターの目的論的世界観に対しては、もう一つ別の解釈が古くから行われてきた。すなわち、彼の宗教的な信念は、その学問的営みの科学性をまったく損なっていないとする見方である。このような主張は、すでにラッツェルやマルテの論文にみることができる。マルテによれば、リッターの文章表現はしばしば目的論的だが、それは単に形式だけの問題であり、因果論的な表現に書き変えたならば、内容は十分に現代的である³⁸⁾。同様の主張は、ハーツホーンによっても長々と展開されており、

目的論的な世界観と具体的な地理学的考察との間には、明確な区別があったと結論づけられている³⁹⁾。実際、資料-2で訳出した「地理学における歴史的要素」の記述には、目的論的見解がほとんど前面に現れていない。ただ、ハーツホーンも述べているように、リッターの死後まもなく出版された講義録『一般地理学』には、目的論的見解がいたる所にちりばめられており、他の著作とは多少おもむきを異にしている。

Ⅲ-2 主要な著作

リッターは、その生涯を通じて、数多くの論文と著書を執筆した。リッターの著作のほぼ完全なリストは、プロットにより1963年に作成されているが、そこには地理学関係のみならず、歴史学や教育学や哲学など、リッターの多彩な著述活動がよく示されている⁴⁰⁾。しかし、リッターの代表的な著作といえば、ライフワークとなった『地理学(第2版)』と、リッター地理学の精髓を明示した『一般比較地理学序説』の二つであることは、衆目が一致している。以下では、これらの著作について、多少詳しく紹介することにした。

『地理学(第2版)』 これは、既述のように、1817/1818年に出版された同名の著作の改定版である。

『地理学(Erdkunde)』という呼び名は、長い書名の冒頭部分にあたる略称であり、正式には『地理学——自然および人間歴史との関連における——、または一般比較地理学——自然科学および歴史科学の研究と教育における確かな基礎として——』という二重のタイトルとサブタイトルをもつ。

この著作の巻数について、ある場合は19巻といい、また時としては21巻といわれることがある。このような混乱は、内容構成についてリッターが行った区分と、実際に刊行された分冊数の差に由来している。彼は、内容のまとまりに応じて、Buch(篇)、Teil(部)、Band(巻)などの表現を用いたが、これらはいくまでも内容的な区分であって、刊行時のまとまり(分冊)と完全には一致しない。ちなみに、第1篇はアフリカ、第2篇は(東)アジア、第3篇は西アジアであり、第4篇としてはヨーロッパが予定されていた。このうち、アフリカは第1分冊のみで完結したのに対して、アジアは第1巻「高アジアの北部と北東部」から第9巻「小アジア」まで20分冊を数える。また、これとは別に、全体を通して地域的なまとまりごとにTeil(部)という数え方があり、ほぼ各分冊に対応している。ただ第15部と第17部は、例外的にそれぞれ2冊ずつに分かれている。したがって、全19部21分冊というのが正確な表現といえよう。各分冊ごとに、その内容と出版年を整理すると以下のようになる。

第1分冊：第1部、第1篇「アフリカ」、1822年、1,051p.

第2分冊：第2部、第2篇「アジア」、第1巻「高アジアの北部と北東部」、1832年、1,143p.

第3分冊：第3部、第2篇「アジア」、第2巻「高アジアの北東部と南部」、1833年、1,206p.

第4分冊：第4部、第2篇「アジア」、第3巻「高アジアの南東部」、1834年、1,244p.

第5分冊：第5部、第2篇「アジア」、第4巻「インド世界(I)」、1835年、1,046p.

- 第6分冊：第6部，第2篇「東アジア」，第4巻「インド世界（Ⅱ）」，1836年，1,248p.
- 第7分冊：第7部，第3篇「西アジア」，第5巻「東アジアから西アジアへの移行」，1837年，825p.
- 第8分冊：第8部，第3篇「西アジア」，第6巻「イラン世界（Ⅰ）」，1838年，952p.
- 第9分冊：第9部，第3篇「西アジア」，第6巻「イラン世界（Ⅱ）」，1840年，1,048p.
- 第10分冊：第10部，第3篇「西アジア」，第7巻「ユーフラテス・チグリス水系地域（Ⅰ）」，1843年，1,150p.
- 第11分冊：第11部，第3篇「西アジア」，第7巻「ユーフラテス・チグリス水系地域（Ⅱ）」，1844年，1,074p.
- 第12分冊：第12部，第3篇「西アジア」，第8巻「アラビア半島（Ⅰ）」，1846年，1,035p.
- 第13分冊：第13部，第3篇「西アジア」，第8巻「アラビア半島（Ⅱ）」，1847年，858p.
- 第14分冊：第14部，第3篇「西アジア」，第8巻「シナイ半島」，1848年，1,141p.
- 第15分冊：第15部，第3篇「西アジア」，第8巻「パレスティナとシリア（Ⅰ）」，1850年，1～780.
- 第16分冊：第15部，第3篇「西アジア」，第8巻「パレスティナとシリア（Ⅱ）」，1851年，781～1,224.
- 第17分冊：第16部，第3篇「西アジア」，第8巻「パレスティナとシリア（Ⅲ）」，1852年，834p.
- 第18分冊：第17部，第3編「西アジア」，第8巻「シリア（Ⅰ）」，1854年，1～995.
- 第19分冊：第17部，第3篇「西アジア」，第8巻「シリア（Ⅱ）」，1855年，996～1,849.
- 第20分冊：第18部，第3篇「西アジア」，第9巻「小アジア（Ⅰ）」，1858年，1,024p.
- 第21分冊：第19部，第3篇「西アジア」，第9巻「小アジア（Ⅱ）」，1859年，1,200p.

各分冊のタイトルが示しているように、リッターの『地理学』は地域別の記述、すなわち、地誌のスタイルをとっている。これは、各分冊の内容構成をみても明らかで、それぞれの地域がさらに細分されて、地区単元ごとに記述がなされている。また、それぞれの地域については、当時のヨーロッパに知られていた当該地域の情報量に応じて、記述内容にかなりの精粗がみられる。このことは、各分冊のタイトルとページ数を参照すれば一目瞭然であろう。

もっとも、そのような事情を勘案しても、ヨーロッパに近づくにつれて（執筆のペースも多少遅れ気味になりはしたが、それ以上に）地域進行のペースが緩慢になったことは否定できない。第2分冊の前書きでは、リッター自身、東アジア2冊と西アジア2冊の計4冊でアジアの部分を完結させる予定だと明言している（注22参照）。結局のところ、リッターにはヨーロッパの部分まで書き進めるつもりが、少なくとも晩年には殆どなかったと思わざるをえない。

計20分冊におよぶアジアは、大きく5つのグループに分けられる。まず東アジアを対象とする第2分冊から第6分冊までの5冊は、1832～1836年の5年間という比較的短い期間で刊行された。第2グループは、第7分冊から第11分冊までの5冊である。第3グループは、1846～1847年に刊行されたアラビア半島に関する2冊で、さらにシナイ半島・パレスティナ・シリアをあつかった第14分冊から第19分冊までの6冊が第4グループを形成している。最後の第5グループは、小アジア半島の2冊であ

る。小アジアについては、3冊目が準備中であったが、著者の死去によって中断された。小アジアの完結後には、さらに第6グループとして、カフカス地域に関する諸巻が執筆される予定であった⁴¹⁾。また、これらの地域的なまとまりに対応して、人名/地名/事項索引が作成され、本巻の末尾に付されたり、別巻として刊行されている。

ちなみに、これらの21分冊は文字ばかりで埋められ、地図の類はほとんど見られない。しかし、リッターは協力者とともに、本巻の進行と並行して計5分冊のアトラスを刊行している。本巻と索引とアトラスは、相互に不可分の結びつきをもち、全体として一つの作品を構成している。

このように、本文だけで2万ページを優に上まわる『地理学（第2版）』は、地理学者としてのリッターがまさに全力を傾注した作品であり、近代地理学における最大の古典といわねばならない。それだけに、従来わが国の地理学者が、この著作を直接検討の対象にしなかったことは、はなはだ残念なことであった。もっとも、その分量とドイツ語の難解さを考えれば、この大作を全巻にわたって精査することは、外国人にとって不可能に近いことも事実である。したがって、地理学史家ベックによる『地理学（第2版）』についての詳細な解説の試みは、その意味で非常に貴重な存在といえる⁴²⁾。

『一般比較地理学序説』 リッターの地理学思想を知るために不可欠なこの論集は、1852年という非常に遅い時期に出版された。この時、リッターはすでに70歳をこえており、最晩年の作品といえる。しかし、ここには前後30年以上の期間にわたって、リッターみずからが地理学の方法論や基本理念を論じた主要な文章が集められている。したがって、本書はリッター地理学にいたる最良の近道であり、ここに収録された文章によって彼の地理学思想を語ることが、わが国の地理学史研究における従来の通例であった。

この論集に収録されているのは、いわばリッターの自信作ばかりである。どの文章も、地理学の本質や目標についての考察ということができ、直接的にせよ間接的にせよ、大著『地理学』の構想および執筆と深く関連している。両者の関係は、一つの盾の二つの面ということすらできる。「『地理学』におけるアジアの諸巻には、地理事象の科学的な考察法に関して、本書の論文の中で示唆したことの具体的な例証が、数多く見られるはずである。」という序文の一節は、そのことをよく示している⁴³⁾。論集は大きく3つに分かれ、目次にしたがえば、以下のように構成されている。

第1部 「一般比較地理学の試みへの序説」(1818年). pp. 1~62.

第2部 「地殻の固定的な形態についての一般的注釈」(1818年). pp. 63~99.

第3部 地理学より科学的な考察を基礎づけるための諸論。ベルリン王立科学アカデミーにおける講演. pp. 101~246.

I 「大陸の地理的位置と水平的広がりについて」(1826年). pp. 103~128.

II 「図的に表現される空間的諸関係を形と数で把握する方法について」(1828年). pp. 129~151.

III 「地理学における歴史的要素」(1833年). pp. 152~181.

IV 「三つの自然界の産物にみられる自然と歴史の地的関連、または地理的産物学について」(1836年). pp. 182~205.

V 「地表の空間的配置と、それが歴史の発展過程ではたす機能について」(1850年). pp. 206~246.

これらのうち、第1部と第2部は、いずれも『地理学』第1分冊に収録され、この大作を理解する重要な鍵を提供している。とくに第1部は、『地理学』を書くに際しての基本的観点や内容構成、方法および資料について述べたもので、リッター地理学の全体構想をよく示している。また、この文章はゲッティンゲン時代の1815年に執筆されたものであるが、クラマーのリッター伝をみると、この部分の原稿が完成したときの様子やリッターの自信のほどが生き生きと描かれている⁴⁴⁾。

他方、第3部に収録された5つの論文には、リッター地理学の中核的な考え方が盛られている。なかでも「地理学における歴史的要素」は、現代のわれわれにも感銘深い文章であり、「その精読は全ての地理学者にとって不可欠である」と、地理学史家のベックは絶賛している⁴⁵⁾。また、第4論文の「地理的産物学について」は、ベルリン時代のリッターが大きな精力を注いだ研究領域の理論的骨格を述べたものである。実際、『地理学(第2版)』には、各種の産物について詳細な考察を展開した箇所が随所にみられる⁴⁶⁾。これらの論考をまとめて一書にする計画が存在したことは、この論文の末尾に付された注に触れられている。しかし、残念なことに、この計画は実現しないままに終わった。

このように、『一般比較地理学序説』という略称は、単にタイトルの出だしというだけで、本書に収録された諸論文の内容を適切に要約していない。ちなみに、本書のタイトルを省略しないで訳せば、『一般比較地理学序説および地理学のより科学的な考察を基礎づけるための諸論』ということになる。

最後に、リッターの死後に刊行された3冊の講義録について簡単に触れておきたい。これらは、彼自身の講義ノートに基づいて編集されたもので、まず1861年に『地理学と地理的発見の歴史』、1862年に『一般地理学』、1863年には『ヨーロッパ』が出版された⁴⁷⁾。最初に出された地理学史に関しては、リッター自身も、出版原稿を作成するつもりであったことが、編者ダニエルの序文に記されている。また、『一般地理学』は、地理学という学問分野について系統的な概説を試みたもので、いわば『一般比較地理学序説』の通俗版に相当する。内容的にも、両者には重なる部分が多い。しかし、すでに触れたように、この講義録にはリッターの宗教的信念がそここに顔を覗かせている。したがって、そのドイツ語が比較的平易だからといって、『一般地理学』だけでリッターを論じることは危険であり、当を失っている。困難ではあるけれども、われわれは『地理学(第2版)』と『一般比較地理学序説』を、リッター地理学の考察にあたって、つねに基本とせねばならない。

注・参考文献

- 1) たとえば、次のようなものがある。
 Beck, H. (1979): *Carl Ritter*. Berlin, 5~6.
 Nicolas - Obadia, G. (1974): Introduction :
 Carl Ritter et la formation de l'axiomatique.
 in : Ritter, C. : *Introduction à la géographie
 générale comparée*(traduction de D. Nicolas -
 Obadia). Paris, 5~7.
 水津一郎 (1974):『近代地理学の開拓者たち』。
 地人書房, 13~29.
- 2) Beck, H. (1979): 前掲1), p. 5.
- 3) たとえば、次のようなものがある。
 岩田慶治 (1951): カール・リッターの位置づけ
 に関する一つの試み. 人文地理 3-3, 27~40.
 岩田慶治 (1953): カール・リッターの方法. 人
 文研究 (大阪市立大学), 4, 350~364.
 村関信男 (1974): 地理教育とカール・リッター.
 新地理, 21-4, 1~14.
 水津一郎 (1979): リッターをめぐる人々. 地
 理, 24-4, 20~34.
- 4) この点については、たとえばラッツェルやシュ
 ミットヘンナーが言及している。
 Ratzel, F. (1879): Zu Karl Ritters hundert-
 jä hrigem Geburtstage. *Beilage zur Allge-
 meinen Zeitung*, Nr. 231, p. 3387. (*Kleine
 Schriften von Friedrich Ratzel* (Bd. I) 所収,
 426~427.)
 Schmitthenner, H. (1951): *Studien über
 Carl Ritter*. Frankfurter Geographische
 Hefte, 25 (Heft 4), p. 35.
- 5) James, P. E. and Martin, G. J. (1981): *All
 possible worlds: a history of geographical
 ideas* (第2版). New York, p. 130.
- 6) Ritter, C. (1852): *Einleitung zur allge-
 meinen vergleichenden Geographie und
 Abhandlungen zur Begründung einer mehr
 wissenschaftlichen Behandlung der Erd-
 kunde*. Berlin.
- 7) Gage, W. L. (1863): *Geographical studies
 by the late professor Carl Ritter of Berlin*.
 Boston.
 Ritter, C. (1974): *Introduction à la géo-
 graphie générale comparée*(traduction de D.
 Nicolas - Obadia). Paris.
- これらのうち、前者については、ハーツホーン
 やディキンソンが悪訳であると批判している。
 Dickinson, R. E. (1969): *The makers of
 modern geography*. London, p. 48.
- 8) 野間三郎 (1963): 『近代地理学の潮流』。大明
 堂, 60~113.
- 9) 岩田慶治 (1951): 前掲3).
 岩田慶治 (1953): 前掲3).
- 10) 水津一郎 (1979): 前掲3).
- 11) 村関信男 (1974): 前掲3).
- 12) 木内信蔵 (1964): カール・リッター. 地理,
 9-7, 65~68.
 水津一郎 (1974): 前掲1), 6~13.
 野間三郎 (1979): カール・リッターの業績.
 地理, 24-4, 7~18.
 ただし、これらの文章には、いずれも不用意な
 事実誤認が散見される。結局、わが国には信頼で
 きるリッター伝がこれまで存在しなかったと考
 えるべきであろう。
- 13) 手塚 章 (1990): アレクサンダー・フォン・
 フンボルトの地理学思想. 筑波大学人文地理学研
 究, XIV, 107~143.
- 14) Kramer, G. (1875): *Carl Ritter. Ein
 Lebensbild nach seinem handschriftlichen
 Nachlass* (第2版, 2 vols.). Halle.
- 15) Beck, H. (1979): 前掲1), 11~61.
- 16) リッターの生涯と業績を簡潔にまとめたもの
 としては、以下の文献が参考になる。
 Sinnhuber, K. A. (1959): Carl Ritter 1779-
 1859. *Scottish Geographical Magazine*, 75,
 153~163.
 Büttner, M. and Hoheisel, K. (1980): Carl
 Ritter. in: Büttner, M. (ed.): *Carl Ritter*.
 Paderborn, 85~110.
 Linke, M. (1981): Carl Ritter 1779-1859.
 in: Freeman, T. W. (ed.): *Geographers.
 Biobibliographical Studies*. vol. 5, 99~108.
 Beck, H. (1982): *Grosse Geographien*. Berlin,
 103~120.
 Engelman, G. (1983): *Die Hochschul-
 geographie in Preussen 1810-1914*. Erd-
 kundliches Wissen, Heft 64, 10~24.
- 17) この時期におけるリッターの地理学思想形成に

注目したのがプレーベである。

Plewe, E. (1959) : Carl Ritter. Hinweise und Versuche zu einer Deutung seiner Entwicklung. *Die Erde*, 90, 98~166.

18) 前掲14), vol. 1, 164~166.

19) この書簡は、下記いずれにも採録されている。

Kramer, G. (1875):前掲14), vol. 1, 112~113.

Plewe, E. (1959):前掲17), 133~134.

Beck, H. (1979) : 前掲1), 27~28.

20) 前掲14), vol. 1, 234~235.

21) 前掲14), vol. 1, 449~454.

22) アジアに関する最初の巻(『地理学(第2版)』

第2分冊)の前書きには、次のような記述がある。

「アジアの部は、今年中に刊行されるであろう2冊目の巻(インド世界を含む)と、願わくは近年中に執筆を終えたい他の2巻(西アジアを対象にする)によって(中略)完結する予定である。(中略)同様の構想に基づいて執筆されるヨーロッパの部が、これにすぐ引き続いて刊行されるであろう。ヨーロッパについては、従来のあらゆる研究を参照するとともに、すでに約10年間にわたって繰り返し行ってきた講義や、その他の研究によって十分な準備を積み重ねてきた。また、何度かにわたる旅行の成果も、可能なかぎり活用されるであろう。」

Ritter, C. (1832) : *Die Erdkunde*. Zweiter Theil (Zweites Buch, Asien; Band I), XII~XIII.

23) クラマーによるリッター伝(全2巻)のうち、第2巻は、ベルリン時代のリッターが旅行先から妻や兄ヨハネスにあてた長文の手紙を集めたものである。

前掲 14), vol. 2, 320p.

24) 下記の小冊子は、リッターについて書かれた文章を、1786年から1981年にわたり608ほど列挙している。

Bernhardt, P. and Breuste, J. (1983): *Schriftum über Carl Ritter*. Geographisches Jahrbuch, Band 66.

25) 手塚 章(1989) : 19世紀の地理学思想史に関するいくつかの見解. 筑波大学人文地理学研究, XIII, 95~109.

26) リッター評価の変遷については、以下の文献に詳しい。

Beck, H. (1956): Carl - Ritter - Forschungen.

Erdkunde, 10, 227~233.

Büttner, M. and Hoheisel, K. (1980): 前掲16), 103~106.

27) Leighly, J. (1938): Methodologic controversy in nineteenth century German Geography. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, 28, 238~258.

Beck, H. (1961) : Die Streitfälle Fröbel-Ritter und Peschel - Klöden, *Petermanns Geographische Mitteilungen*, 105, 105~118.

28) この点については、野間三郎(1963) : 前掲8), 106~109 および 115~116 に詳しい。

29) Ratzel, F. (1879) : 前掲 4)。

30) ラッツェルに対するリッターの影響に関しては、シュタインメツラーが詳しく検討している。

Steinmetzler, J. (1956): *Die Anthropogeographie Friedrich Ratzels und ihre ideengeschichtlichen Wurzeln*. Bonner Geographische Abhandlungen, Heft. 19, 109~115. (山野正彦/松本博之訳『ラッツェルの人類地理学』. 1983年, 地人書房. 168~176.)

31) Marthe, F. (1879): Was bedeutet Carl Ritter für die Geographie?. *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, 14, 374~400.

Wagner, H. (1878) : Der gegenwärtige Standpunkt der Methodik der Erdkunde. *Geographisches Jahrbuch*, 7, 550~636.

Wagner, H. (1880) : Bericht über die Entwicklung der Methodik der Erdkunde. *Geographisches Jahrbuch*, 8, 522~598.

Wisotzki, E. (1897) : *Zeitströmungen in der Geographie*. Leipzig.

32) Beck, H. (1956) : 前掲 26), p. 228.

33) Schmitthenner, H. (1951): 前掲 4)。

34) 前掲 17)。

35) Beck, H. (1979) : 前掲 1)。

36) Beck, H. (1979) : 前掲 1), 112~115.

37) Hettner, A. (1898) : Die Entwicklung der Geographie im 19. Jahrhundert. *Geographische Zeitschrift*, 4, p. 311.

38) Marthe, F. (1879) : 前掲 31), 393~394.

39) Hartshorne, R. (1939) : *The nature of geography*. Lancaster, 59~63. (野村正七訳『地理学方法論』, 1957年, 朝倉書店, 50~55)

40) Plott, A. (1963): Bibliographie der Schriften

- Carl Ritters, *Die Erde*, 94, 13~36.
- 41) 前掲 14), vol. 1, 416~417.
- 42) Beck, H. (1979) : 前掲 1), 65~122.
- 43) 前掲 6), p. v.
- 44) 前掲 14), vol. 1, 238~239.
- 45) Beck, H. (1979) : 前掲 1), p. 120.
- 46) この点については、マルテとプレーベが詳しく紹介している。
 Marthe, F. (1879) : 前掲 31), 395~396.
 Plewe, E. (1979) : Carl Ritters "produktenkundliche" Monographien im Rahmen seiner wissenschaftlichen Entwicklung. *Geographische Zeitschrift*, 67, 12~28.
 ちなみに、『地理学 (第2版)』で取り上げられた産物のうち、主要なものを列挙すると以下の通りである。
 第3分冊 : 茶 (pp. 229~256)
 第5分冊 : チーク (pp. 803~815)
 ビャクダン (pp. 815~823)
 ココヤシ (pp. 834~854)
 胡椒 (pp. 865~875)
 バナナ (pp. 875~888)
 インド象 (pp. 903~923)
 第6分冊 : セイロンニッケイ (pp. 123~142)
 真珠 (pp. 160~180)
 ダイヤモンド (pp. 343~368)
 イチジク (pp. 656~688)
 ライオン/トラ (pp. 688~723)
 阿片 (pp. 773~800)
 第8分冊 : 桑/絹 (pp. 679~710)
 イナゴ (pp. 789~815)
 第9分冊 : サトウキビ (pp. 230~291)
 第11分冊 : オリーブ (pp. 516~537)
 イチジク (pp. 537~549)
 ザクロ (pp. 549~561)
 糸杉 (pp. 567~582)
 第12分冊 : 乳香 (pp. 356~372)
 第13分冊 : コーヒー (pp. 535~608)
 ラクダ (pp. 609~759)
 ナツメヤシ (pp. 760~858)
 第14分冊 : マンナトネリコ (pp. 665~695)
 第18分冊 : 桑 (pp. 481~499)
- 47) Ritter, C. (1861) : *Geschichte der Erdkunde und der Entdeckungen*. Berlin.
 Ritter, C. (1862) : *Allgemeine Erdkunde*. Berlin.
 Ritter, C. (1863) : *Europa*. Berlin.

(資料-1)

リッター, C. (1818) : 一般比較地理学の試みへの序説
 (『一般比較地理学序説』, 1852年, 3~10)

地理学の全体を、内的に関連しあい、より科学的な一つの体系にまとめあげるという試み(訳注: 『地理学』をさす)への序説では、内容構成や方法や資料について述べる前に、その人間的観点について触れないわけにはいかない。それによって初めて、他の議論が基礎づけられるだろうからである。

したがって、自然と歴史の関係や、大地と民族の関係や、個々人と地球全体の関係に対して、上述の人間的観点がどこまで接近しうるかを、まず手短かに論じることで、筆者の試みの最終目標に対して読者の注意を喚起することにしたい。

一般に、個々人が自己の使命を十分に満たしたり、何事かを成し遂げるためには、自分の力量と外部的な諸条件(すなわち環境)、さらには外部条件とみずからの関係について正しく認識しておくことが必要である。同じように、どんな人間集団や民族も、その真の目標を達成しようとするならば、みずからの内的小よび外的力量や、隣接集団の力量、さらには外部から作用をおよぼしている諸関係の総体に対するみずからの位置づけを、正しく知覚しておかねばならない。

盲目的な努力や自覚をとまなわない願望は、人間をいかに昂揚させ刺激するにせよ、けっして正しい状態や行動に結びつく力を人に与えることはない。思慮深い努力や、力量に対応した自覚的な願望こそが、明晰さと真理の結びつきを通して、立派で偉大で記念すべき永遠の行為をもたらすのである。また、われわれが自然のなかに神の存在を予感するにいたるのも、無秩序にみえる諸力のでたらめな多様性によるのではなく、かぎりない豊饒さと力のなかに法則性と秩序を認めることによるのである。

しかし、人間の正しい意思とか、自己の外部でみずからの力量に対応しているものについての認識とか、さらには両者の相互的な浸透や影響とかについては、ひとえに自分自身をより深く認識する努力と、また、人類の歴史が明らかにしてきた全てのことがらを考察する努力から出発せねばならない。

個々人が、それぞれ固有の仕方を持ち、それぞれの企てに必ずしも適合していないように、すべての民族が、それぞれの目標を達成して、栄光と繁栄のまばゆい冠を手にいられるわけではない。各人には、それぞれ固有の特性がそなわっており、その特性を伸ばすことによって各人の発展が実現される。各民族についても、このような事情はまったく同じである。これらの発展の到達点が、個々人の場合には道徳をはじめとする人格的な偉大さであり、民族の場合には民族性や国民的な偉大さということになる。それらは、時間的あるいは空間的な規模によってではなく、精神的な偉大さによって現代や未来を活気づけており、現代の国民生活や来るべき歴史など、あらゆる領域にわたって、その輝かしい光を投げかけている。

しかし、上で述べた特性は、各民族がみずから獲得したり、各人がみずから身につけるとい性格のものではない。両者は、そのような特性の独自性をたんに保持しうるだけである。特性それ自身は、不滅ならざる人間ではなく、より上位の力に由来している。人間の力のうちにあり、また人間の使命たるべきことは、これらの特性を自覚して生活することである。なぜなら、このような自覚を欠いた場合、その行為が当を得たものにはなりえないからである。

民族の特性を認識するためには、その本性から出発せねばならない。民族自身やその構成員、周辺民族との関係を知らねばならない。また、国家と国土をぬきにして民族を考えることはできないので、これら両者と民族の関係や、さらに両者と隣接諸国との関係を知る必要がある。

ここにおいて、民族におよぼす自然の影響が問題になる。その影響力は、個々人におよぼす自然の影響力よりもずっと大きい。なぜなら、ここでの影響は、集団が集団におよぼす作用であり、民族の個性は個々人の個性にまさるからである。

この種の影響はよく知られており、古くから民族史や国家史や人類史の分野で重要な研究テーマの一つであった。近年においても、この問題は声高に語られている。

しかし、自然はつねに少しずつ、また白日の下というよりも、目に見えないかたちで作用することが多い。穀粒は地中で発芽し、また殻に包まれた芽のなかには、新しい世代の出現がすでに準備されている。このように、自然の連関と作用は、その見かけ以上に奥深く、かつ外見の多様さが予想させる以上に単純であり、また驚くほど広範囲におよぶとともに、重大な結果を引き起こす。自然がおよぼす静かな力は、その法則性の核心にまで到達するために、それらの諸現象を正しく受容する同様に静かな精神を必要とする。

この種の精神を会得するためには、しばしば一つの目印や、然るべき眼差しや、心のつぶやきがあれば十分である。なぜなら、類似のものは、たやすく理解しあうからである。しかし、少なくとも今日において、自然と人間の距離はもはやそれ程に近くはない。いまや自然は、人間にとって秘密に満ちた存在になってしまった。今では、自然の諸力の複雑な相互作用や、自然の諸現象の相互的な関係を通して、自然を考察するしか術はない。そうすることで初めて、人類が情熱をもって歩もうとする全ての道に、自然は光と生命を投げかける。その輝きはまさに燦然たる星のようであるが、人間にとって、それを完全に把握することは不可能である。また、そのとき自然は、生命ある自然とか生命なき自然とわれわれが呼んでいる全世界の諸関係を明示するのであり、われわれが自然に問いかける全ての疑問、とりわけ人間についての疑問に対して、根本的な説明を与えてくれる。

思うに、人類の歴史や民族の歴史にとって、従来あまり重視されてこなかった側面（人類や民族が活動を繰りひろげる舞台としての側面）から、地球を人類との基本的な関係において把握することは、すなわち地表や自然の姿や生活を、その全関係について可能なかぎり明確に把握することは、きわめて価値ある試みではないだろうか。また、その単純にして広範にみられる地理法則の展開を、固定的な存在や、変転絶えまない存在や、生命をもつ存在のうちに跡づけることは、きわめて価値ある試みではないだろうか。

人間とは無関係に、地球は、人間なしでも、また人間以前にも、自然現象の舞台である。地球上の諸々の存在を支配する法則は、けっして人間に由来するわけではない。地球についての科学は、それゆえ、それらの法則を地球それ自身に問わねばならぬ。地球上に自然が記した筆跡やヒエログリフを、われわれは記述し考察せねばならないし、その構造を解明する必要がある。われわれは、その面積や深さや高さを測定し、その形態を基本的な特性にしたがって整理せねばならない。また、あらゆる時代と民族の観察者たちに、さらには民族自身に耳を傾けることで、われわれは、彼らが自然から学んだことや、自然が彼らに教えたことを理解する必要がある。そこから明らかになった諸事実や、あるいは以前から伝えられてきた諸事実を、従来しばしば無視され忘れられてきた量や多様性や統一性に着目して、われわれは、把握可能な一つの全体にまとめなければならない。

かくして、個別の構成要素やその系列から、結論が立ち現れることになる。その結論が正しいことは、そこでの自然現象や、また、その在り方や特性が、地球上の諸々の存在のうち、どれかの系列と結びついている民族の生活によって証明される。なぜなら、民族にしる人類にしる、自然と理性の働きの影響下で、精神的かつ物質的な要素群から、次第にすべてが関連しあった世界生活の領域に導かれることは、いと高き定めによって規定されているからである。それぞれの有機体は、内的な連関と外的な環境に応じて形成されており、たがいに規定しあい高めあう関係にある法則と形態のもとにある。したがって、そこには偶然の介入する余地はまったくない。

河谷や山脈、あるいは一つの民族や国家など、限定されたものについてだけでなく、あらゆる平地や高地、すべての民族や国家についても、これらの相互的な規定条件が、その発生から現代にいたるまで、それらの歴史に深く関与している。それらのもの全ては、ひとしく自然の影響下にある。自然の影響を直接見たり聞いたりするのが、きわめて限られた場合だけであったとしても、それが目に

見えないかたちで、どこでも何時の時代にも深く作用してきたことは、ちょうど、いと高き神の存在が知られていなかった時代にも、神がつねに遍く存在したことと同じである。

自然の作用については、当初、散発的で個別的な事例が尊敬の目をもって見られていたにすぎず、人間の目で注意深く検討されることもなかったが、逆に、来るべき将来においては、幾重にも錯綜した自然の諸力が生み出す矛盾が解消され、その統一性をわれわれの目から隠してきた深い霧が消え去り、まさにその統一性が人知の視野に立ち現れることであろう。

そのような信念をもつことによって、自然の作用をその連関において包括的に捉えようとする努力は、それが今もって微弱であるにせよ、真理を求める精神に導かれているかぎり、人類にとって望ましい結果をもたらすであろう。また、このような観点に立つことで初めて、本書のような試みは、現代の読者から好意的に迎えてもらうことができよう。それによって初めて、その内容が生きることになる。

上述の課題を達成することは、一人の人間になしうることではない。その探求にあたっては、各研究者が生涯をかけて行った貢献を、それぞれ後続の世代に引き継いでいかねばならない。個々の研究者にできることは、自分に与えられた能力をもって、これらの営みに参加することであり、また、多様な現象のなかに統一的な法則性を見いだしていく歴史的な発展過程のうえに、みずからの足跡を残すことである。

そのような中で、歴史上の英雄をたたえる名誉の栄冠は、以下のような条件をそなえた研究者に贈られるであろう。すなわち、みずから明敏な洞察力と強靱な精神力をそなえ、錯綜をきわめる個別事象のなかから、また、個々の人間や民族や民族群の思想と歴史のなかから、人間の本性を奥深く、かつ高い視点で照らしだし明示できるような研究者がそれである。そのような研究者こそ、それぞれの民族が国民的発展や道徳的発展の頂点にいたる固有の道筋を指し示すことで、あらゆる民族にとって永遠の導き手になるであろう。

おそらく何時の時代か、自然界と道徳界を同時に洞察する目をもち、世界歴史の全体に立脚して未来と過去を展望できるだけの力をもった研究者が出現することであろう。その時には、特定の地域に居住する特定の民族に対し、これらの一般的な諸条件に基づいて、発展の必然的な道筋（すなわち、永遠にして公正なる運命の神が、それぞれの民族に割り当てた繁栄を手に入れるために辿らねばならない道筋）を指し示すことができるようになるだろう。

この真に偉大な目標は、これまで多様に試みられ、国家政策の最高課題でもあったが、それに対する全面的な取り組みは、自然と歴史に対して魂に満ちた目をもって大昔の預言者たちが、われわれに残してくれた詩のなかに存在するのみである。科学の領域で、この長く失われていた目標に再度接近するためには、本書において具体的な結果とともに示されるアプローチの仕方が、一つの準備段階になるであろう。

最初のうちは目標が定まってい不见えるかもしれないが、本書におけるアプローチの仕方は、人間的な観点に立てば、出発点から最終目標に向かって、ほぼ一直線に進んでいる。また、本書では最終目標まで到達せず終わっているが、それでも本書で得られた知見や展望は、けっして取る

に足りないものではないように思われる。個々の経験的事実に埋もれて道を見失うかわりに、本書では、一歩ずつ経験的事実を積み上げるやり方をとった。したがって、本書のアプローチは、一般法則を表現する曲線のようなものである。この一般法則があればこそ、経験的事実（あるいは素材）の多様性をきちんと整理することができ、また、これら多様な素材を、高次の目標にしたがって考察することができるのである。

大は地球表面から小は各地点にいたるまで、自然が呈示する全ての主要形態についての一般法則が、このアプローチにおける考察の対象である。なぜなら、生命なき地表と生命ある地表の全基本タイプに関する諸々の一般法則を結びつけることによって初めて、全現象世界の調和（ハーモニー）が把握できるからである。

人類という概念は、地球を抜きにしては、決して考えることができない。同様に、個々の人間や、地球に対して個人以上に従属している民族や、土地の自然に固く結びつけられている国家などは、地球上での自身の位置づけについて正しい認識をもたないかぎり、みずからの本質に決して到達できないであろう。

換言するならば、世界の歴史において、民族や国家の繁栄は、民族とその居住地域が一体化すること、国家と自然と人間生活がたがいに共鳴しあうこと、あるいは自然と政治が調和しあうことによつて、もたらされたり促進されたりするのである。

この種の一体化や共鳴を、かつて大昔にそうであったように、民族の成熟とともに無意識のうちに実現することができない場合には、今日のわれわれのように、全ての調和（ハーモニー）の源泉であるこの共鳴の法則（すなわち永遠のテトラクテュス [訳注：ピタゴラス学派の教説の一つ。ここでは世界秩序の意]）を、科学の力を借りて探求し、われわれの意識にはっきり定着させねばならない。

（資料-2）

リッター, C. (1833) : 地理学における歴史的要素
 (『一般比較地理学序説』, 1852年, 152~181)

地理学は、何よりもまず、地表の諸空間を対象とする。そしてそれは、これらの諸空間が（いかなる自然界に属する事象であれ、またいかなる形態を呈するにせよ）地的に充填されているかぎりにおいてである。それゆえ、地理学は諸地点の並置を記述し、その関係を、その最も個別な様相においても、また最も一般的な側面においても、捉えることを目指している。この点で、地理学は歴史学と区別される。歴史学の目標は、できごとの変遷や、ものごとの継起および展開を、個々におよび全体として、また内的におよび外的に解明し、記述することだからである。これら二つの学問は、一方が同一時点での並起事象、他方が継起事象の遷移に関して、いずれも観察できる現実の個別事象から出発する。しかし、どちらの学問もすぐに、観察できない諸関係、幾何学と年代記をとおして初めて把握できる諸関係の考察へと移行する。さらに、これらの諸関係にしても、精神界・物質界の双方で、やがて明確な外的尺度を欠くようになり、しだいに内的なもの、自然法則、倫理的なものが前面に現

れてくる。したがって、これら二つの学問は、その高度な段階、すなわち関係と法則の説明やその展開においては、両者の結合とその思索の深さに依存している。このことは、これら二つの実証的な科学が、哲学的な問題についても思索をめぐらす必要があることを示している。

そもそも、純粋に同一時点での事象の並存は、それ自体、それら事象の継起なしには存在しえない。地的に充填された空間的諸関係に関する科学が、時間的次元や時系列的連関を無視できないことは、逆に、地的に充填された時間的諸関係に関する科学が、それら諸関係の展開する舞台を無視できないのと同様である。歴史が展開するには、そのための舞台が必要である。歴史形成のいたる所で、明示的であるにせよ、ないにせよ、地理的な要素が必然的に組み入れられる。このことは、歴史叙述についてもあてはまる。ツキディデスやヨハネス・ミュラー（訳注：スイスの歴史家 [1752-1809]）の場合、彼らの歴史書の冒頭には、地理的要素に関するかなり詳細な概観がある。また、ヘロドトスやタキツスなどの大歴史家の場合には、地理的要素に関する記述が歴史叙述の中に織り込まれている。他方、地理的要素を黙殺している一部の歴史家においても、その響きや色合いを文章中にとどめている。かつてベーコンやライプニッツが構想し、ヘルダーによって展開された歴史哲学の流れは、近年にいたり多様な方向に発展しつつあるが、そこでも地理的要素、すなわち地球の空間的諸関係の重要性が、ますます大きな意味をもつにいたっている。

地理学が単なる便覧、空虚なこしらえものでなく、地的な空間的諸関係に関する真の学問であろうとするならば、地理学にとっても歴史的要素は同様に不可欠の重要性をもっている。ちなみに、便覧の地理は、広い地域を概観するための骨組みや枠組を確かに提供してくれるが、地域空間の充填それ自体を、その本質的な諸関係や、内外的および外的な法則性を通じて示すことはない。

それゆえ、漠然とした感覚や、あるいは明瞭に自覚された欲求に基づいて、地理学は昔から歴史学の仲間とされてきた。ヘカタイオスやディカイアルコスやストラボンを初めとして、地理学者はその最良の業績を歴史の領域において残してきた。東方の諸民族（アラブ人や、とりわけ中国人）は、その地理記述において、ほぼ完全に歴史的である。ヨーロッパでは、近年に至るまで、中世には教会の区分法にしたがって、またその後は政治・統計上の区分原理にしたがって地理記述が行われてきた。これに対して、近年においては、プロテウス（訳注：ギリシア神話中の海神）のように変幻自在なこの学問の固有な本質を捉えるために、これらの異質な混入物を振り捨てて、いわば完全に純粋な地理学 (reine Geographie) を目指すべきだと主張する一派が存在する。

ビュアシュの自然アトラスやガッテラーの地理学理念を主要な出発点として、自然的基盤を求めて開始されたこの地理学改革運動は、その論理を最後まで押し進めると、すべての歴史的要素を地理学から除去することで、単に物理的あるいは自然的な地理学を成立させずにはおかない。しかし、そのような地理学は、たとえ考へうるかぎり完全なものが構築されたとしても、地理学を先に述べたような内容、すなわち「地的に充填された諸空間の科学」と考えるならば、そのごく一部分にしか相当しない。地理学のこのような縮小と、ある意味での硬直化は、これまでも無力な便覧の地理の試みの中で、自らをより純粋に見せかけるために、あらゆる歴史的内容を振り捨てるという形で、歴史的にしばしば繰り返された。この地理学の縮小と硬直化がさらに深刻なのは、それが自然一般の本質にまで

到達する深い洞察を伴っていない点である。すなわち、学問的基礎の確立を通じて、歴史的要素の追放によって地理学が失ったものを、他の面で埋め合わせるという具合にはなっていない。また、純粋地理学の主張をさらに徹底させるならば、幾何学的要素と代数的要素、すなわち数学的要素さえ、地理学の内容から追放することが必要だろう。従来しばしば繰り返されてきた純粋地理学の運動は、学校教育や科学教育一般のシステムに少なからざる影響を与え、さまざまな出来ばえのハンドブックと概説書を数多く生み出してきたが、科学としての見地から満足しうる地理学の著作は、とうとう一冊も現れなかった。このことに対する不満から、人々は、従来もしばしば見られたように、一方の極端から他方の極端へと今また陥っている。純粋地理学や自然地理学に対する不満から、人々は再び、歴史的側面が地理学において重要な意味をもつと見なすようになった。初等教育や高等教育で用いられる教科書に対しても、歴史的要素を加味することで、学問の真の味わいや威厳が与えられると人々は考えるようになった。かつて、道路や橋梁や戦場や要塞や兵員数等々に関する記述が軍事地理学と考えられ、また、各国を構成する空間的諸要素を列記したり、それらを数値的に示すことが政治地理学もしくは統計学と考えられていたように、今また人々は、地理学の中に歴史に関するさまざまな知識を詰め込むことが、地理学の威厳を高め、その価値を発揮する道であると信じている。例えば、先ごろ初等教育用の教科書として書かれたシャハトの地理学書は、他の多くの同種の試みとともに、このような流れの中に位置している。そこでは、諸地点および諸地域に関する地理的な記述の中に、歴史的な記述が付随している。それは、特定の教訓的な歴史上のエピソードである場合もあるし、それぞれの場所に関する歴史的な概観である場合もある。スイス東部のグラウビュンデン地方の記述では、レチアの歴史が古代から概観される。また、ライン川の流域をめぐっては、スイス共和国の簡単な歴史が述べられるとともに、ローマ軍やフランク族の戦闘に触れ、オランダの歴史の概観がなされる、といった具合である。地理的な記述の中に挿入されたこれらの歴史的記述は、もちろんどれも興味深く、時として非常に優れた出来ばえを示している。他方、ギムナジウムの上級クラス向けにも、この種の新しい地理学への要求に応じたものとして、昨年、フォルガーの苦心の労作が現れた。その中で彼は、国にせよ、民族や都市や山にせよ、それぞれの記述の中に非常な注意深さをもって、それらの名称の由来と、古代から近現代にいたるまでの歴史の簡潔なまとめを記している。彼はこれをもって比較地理学と呼び、地理学を歴史的に一つの全体として提示しようと試みた。すなわち、古代と中世は学校教育のために、また近代と現代は実社会のために、というわけである。フォルガーの書や、先に触れたシャハトの書に対して、その有用性を否定することはできない。しかしながら、これらの私にとっても親しい友人である二人の著作がもつ長所を見逃すわけではないのだが、また、これらおよびこれらと同種の試みを非難するつもりもないのだが、このような方向によったのでは、少なくとも科学としての地理学の進歩を期待しえないことを認めないわけにはいかない。真の意味での学問は、その全容を提示するときも、その部分要素を述べるときも、科学的な連関に欠ける点があってはならないが、上で述べたような試みからは、このような意味での学問に対して何らの貢献も期待できない。

なぜなら、ある科学が何よりもまず他の科学からの借用物を必要とし、その刺激に依存しているならば、それは非常に憂慮すべき事態だからである。それ自身の固有の胚芽をもたない学問は、みずか

らの生を発展させることもできなければ、他の学問分野に対して貢献することもできない。生まれつき成長の芽をもたない学問は、生命に欠けていると言わねばならず、いかなる見せかけの飾りもこれに生命を与えることはできない。それは、人間精神の教育にまったく貢献することがなく、したがって学校で教えられる一連の科学のなかで固有の地位を占めるに値しないであろう。

地理学は、その固有の本質から、初期段階においては個々の地点の個別的空間事象の考察として立ち現れた。そのさい、個人にせよ、民族にせよ、帝国と国家の全システムにせよ、歴史上の個人や団体に関する同じく個別的な現象と結びつけて考察が行われた。やがて地理学はしだいに成長し、その研究対象物の全体、すなわち地球とそれを構成する全部分空間を発見するに至った。かくして初めて、地理学の本質に関する固有の認識に到達したのである。地理学は、事象の記述から、その記述されたものに関する法則の追求へと高められた。単に事象を列挙するだけではなく、地的に充填された諸空間に関する関係の学へ、また地上の局地的な現象や一般的な現象の因果的連関の追求へと発展したのである（かつてフランシス・ベーコンは、「結果は原因と結ばれてあるごとく」と述べた）。地球に属する全てのものを包含する地理学の研究領域では、その広大な地表が、地表圏との相互連関のもとで、あるいは有機的に関連しあった部分空間の配置において、また地表に存在する数え切れない産物の限りない多様性において、もっとも複雑なモザイク模様と同様の状況を呈している。さらに、ここでは、「とき」に関するすべての事象系列が複雑に絡みあっている。

では、地球上における地的に充填された諸空間に関して、地理学が解明せねばならない固有の課題は何であろうか。その全ての諸関係の研究という言い方を別にすれば、それはすなわち空間の研究であり、その内容（充填）の研究であり、また、両者の関係の研究である。

それゆえ、地理学はまず第一に、空間の代数的な諸関係、すなわち合計や距離や大きさに注目する。ついで地理学は、空間の幾何学的な諸関係、すなわち姿や形態や位置に注目する。

これに対して、諸空間の物質的内容（充填）に関する地理学の関心は、その構成や形態や内的諸力それ自体にあるわけではなく、またその自然法則にあるわけでもない。そのような問題に関しては、物理学や化学などの自然諸科学が存在するからである。地理学が関心をもつのは、むしろ地球上におけるそれらの分布状況や分布域や分布に見られる法則性である。これらの問題に対して、自然諸科学はほとんど考慮を払っていない。さらに、それらが地上との結びつきにおいて示す現象、たとえば位置や形態、大きさ、距離などとの結びつきから生じる現象に対しても、地理学は関心をもつ。

自然的諸力や三つの自然界による物質的充填、すなわち大地や地質的な連関のもとにある地殻、互いに結合しあいながら分布している植生、数多くの種がそれぞれの生存空間をもつ動物界に加えて、精神活動をいとむ個々人や多数の民族からなる人間界も諸空間の物質的内容の一部である。人類は、大部分の物質のように大地に縛りつけられてはいないものの、その肉体的および精神的な発達においては、大地からさまざまな制約を被っている。諸空間が無機的世界や有機体一般、さらには個々人や民族や人類全体の精神的発展におよぼす影響力に関して考察することも、それゆえ地理学の重要な一部分である。確かに、これらの諸関係や物質的充填や空間的制約はけっして一定不変の法則性を示すわけではなく、これらに見られる結びつきも固定的なものではない。すなわち、それらは全体として

の地球有機体に帰属し、地球有機体に固有の変化や進化、物理・宇宙的な発展過程のもとに置かれている。また、人類にしても、個人および民族の双方が、倫理法則にしたがって固有の発展過程をたどるものである。しかしながら、人類が地上で生活をいとなむものである以上、住み家としての惑星地球の物理的発展過程と、(個人にせよ民族にせよ)人類とは、制約的な対立関係に置かれている。したがって、人類に対して地球および地上の諸地点がおよぼす諸制約と諸関係、時代とともに変化し、物理的なものから生物的さらには精神的なものへと進化する諸関係と諸制約の解明は、まさに地理学の課題の頂点に位置するものである。

地理学の領域については、当初、あらゆる知識領域に関与すると見られ、地理学の本質に対する無理解から、考察の深さを求めるかわりに、幅と広さがいたずらに追求された。このような領域拡張は、最も実り豊かな果実から地理学を遠ざけるものであった。これまでの考察から地理学に固有の領域がいかなるものであるかが、かなり明確に認識されたことであろう。このような認識を通じて、われわれは、地理学に不利益をもたらす隣接領域への逸脱をいましめ、時間と精力を、周辺のことがらにではなく、まさに中核的な課題の解明に振り向けることで、学問のまぎれと浅薄化を防ぐことができる。

地理学全般に関するここまでの考察は、われわれに、その部分的な考察を初めて可能にしてくれる。地的に充填された諸空間の代数的および地理的な諸関係についてと、水平的な次元におけるそれら諸空間の形態に関しては、すでに他の場所で述べた。以下では、われわれにとって、歴史的エピソードではなく、まさに地理学における歴史的要素と呼ぶべきものについて、なにがしかの検討を加えることにしたい。そこでの目的は、歴史的要素の導入を通じて地理学に高い意義づけを与えることにあるのではなく、むしろ地理学本来の意味が、これまでしばしば見られたように、それによって失われないようにすることである。

本論文においては、このような課題を十分に検討しつくすことが不可能であるため、いくつかの象徴的な事例を取り上げることにする。そうすることで、考察内容をわかりやすくかつ簡潔に伝えることができるであろう。

地上に形成され展開される諸空間、諸時間、諸形態、空間的充填は、それ自体としてはつねに一定の価値をもっているが、人類の住み家としての地球に対する関係という点では一定不変ではなく、数千年あるいは数百年の年月とともにその相対的な価値を大きく変化させる。それゆえ、考察対象としての空間的充填の様相は、世紀により年代によって、異なった姿を呈する。アレクサンダー・フォン・フンボルトが述べているように、人類が新しい道具を作り出すことによって、みずからの限られた感覚世界を押し広げ、大地の内部や海の底にまで目を開き、そこで、気圧計や温度計や振り子やボーリングや掘抜井戸などの助けを借りて、深部の温度とか、未知の地質や水体とか、塩の集積層とか、深部の地層や水の層とそこに含まれるさまざまな物質などを明らかにしたとき、地表の充填された諸空間は、人類の住み家として、それまでとは異なった関係を人類に対してもつようになったと言わねばならない。同様に、地上においても、気圧計や湿度計や望遠鏡やアストロラーベなどの測定具が人間の視界や知覚世界を大きく広げ、その分だけ外部世界を人間の身近に引きつけた。空間的諸関係が

人類の住む地球に対しても関連は、これによっても大きな変化を受けたのである。

下方および上方への距離の変革に加えて、遠隔地とのコミュニケーションの普及は、あらゆる方向への空間的隔たりに大変革をもたらした。上で述べた新しい道具類の発明や科学の発展、文化の発達とともに、人類は、動植物が他の気候帯へ首尾よく拡散していくように、他の諸空間へ移動することを学んだ。それまで近づくことさえできなかった地球の果ての遠隔地に人々は進出した。氷に閉ざされた南極圏や北極圏、高峻な山岳、絶海の孤島などのように、それまで人間の痕跡が見られなかった地域までが、今や文明社会の影響圏に組み入れられた。かつて存在しないと思われていたものが姿を現し、これまで遠くにあって到達不能と思われていたところが、現在では容易に到達できる範囲、さらには日常的な交通圏に含まれるようになった。

地上における空間的充填は、周知のように、固体と流体、あるいは動かないものと動くものという二つの形態から構成される。それゆえ、固定的な諸地点間の空間的距離に加えて、流動的形態の空間的差異や、地上における空間充填的な流動が問題となる。流動をめぐる諸関係は二重である。すなわち、流動が生じる空間と時間の諸関係である。さらに、これらの空間充填的な流動それ自体も二重である。まず、物理／化学的な法則にしたがう純粹に物理的な流動が存在する。例えば、熱や電気や磁気などのように重さを持たない物の流動は、時空間的に大なり小なり同じ範囲で重なり合うであろう。これに対して、空間を物質的に満たしている、すなわち知覚できる流動の場合、その空間的および時間的領域は、それぞれ特定の境界線で区切られることになる。風系、潮汐、海流、雲の生成をもたらす大気の変化や、その他もろもろの大気現象がこれに相当する。さらに、これらの流動によって移動させられる物体、生物であれ無生物であれ、みずからの意志によってではなく、単に機械的に移動させられる物体も、このカテゴリーに属する。

上で流動は二重であると述べたが、単なる物理的な流動のほかに、もう一つ別の流動が存在する。すなわち、地上の生活と結びつき人類の魂を吹き込まれた流動がそれである。人類は空間充填的な流動をみずからの目的に利用しており、帆船や気球や馬やトナカイやラクダやさらには蒸気船などを用いて、流動を仕事の担い手にしている。これによって、地上の諸空間とそこでの重要な諸関係が、人類にとって大きく異なった意義をもつようになったばかりでなく、そこへ到達したり、定期的に行き来するための時間が、地上の諸民族の日常的な活動のなかに織り込まれることになった。

この大変革は、火山や地震や洪水などの自然災害によって引き起こされる大規模な変化以上に重要である。大災害は発生時に強い注目を浴びるのに対して、この大変革は、歴史の流れの中できわめて緩慢に進行し、人類の住み家としての地球に対する関係という点では、ほとんど注目されることもない。しかし、この大変革こそが、人類の住み家としての地球を数千年来の過去とは違ったものへと変容させたのであり、また、その充填された諸空間をめぐる諸関係を、過去とは全く別のものに変容させてしまったのである。まさにこの点にこそ、過去から将来にわたっての人類の偉大な贈り物が存する。人類の住み家、人類の地上のあばら屋を、ちょうど精神が肉体を制御していくように、また幼児が青年に成長していくように、その力やその手足と器官の使い方やその動きや機能にしたいだけに習熟し、ついには人間精神のもっとも高い要求にさえ応じられるように使いこなすのである。ここで

の人類の課題は、ちょうど農民のそれと同じである。農民は、あらゆる才能をかたむけて自分の畑を
 してくださいに知るようになるからである。空間充填的な流動に人類の魂を吹き込むことにより、す
 でにフェニキア人の時代に、インド・オリエント世界はヨーロッパのヘスペリア地方（訳注：イタリ
 アやスペイン）に大きく近づいた。また、昔から推測されてはいたが、実際に目で見ることもなく、
 その意味では月よりも遠かった新世界（地球のもう一方の半球）が、コロンブスの時代にわれわれの
 世界と結ばれるに至ったのも、それを通じてであった。さらには、数千の散在する島々からなる南西
 もしくは南の水半球が、この半世紀来、ようやくその孤立を脱して、それまで没交渉であった北東の
 陸半球としっかり結合するに至ったのも、それによってなのである。かつては相互に分断されていた
 地上の岸辺が、今や地球全体を通じて一つの単元を形成している。このことは、科学にとってと同様、
 文化面についても、また経済面や交通面についても言えることである。歴史や政治、さらには文化一
 般に対して、このことは大きな影響を及ぼさずにはいない。

このように、地上の物理的諸関係が歴史的要素によって変化するという点が、地上の諸関係全体に
 関する科学としての地理学を、天文学の諸分野から本質的に区別する。天文学においては、宇宙の構
 造を研究するときも、太陽系を研究するときも、一つの天体としての地球を宇宙的な時空間関係、す
 なわちそれ自身に変化することのない絶対的な時空間関係において考察するのであって、相対的な地
 上の時空間関係を考察に含めることはないからである。天体間を隔てる距離の変動と、それらの天体
 が行う一定不変の公転は、セソストリス（訳注：古代エジプトのファラオ）の時代このかた、それら
 に関してわれわれの知識が進歩したということを除くと、太陽系の性格に関する如何なる変化とも結
 びついていない。これに対して、固定的な諸形態によって不動のごとく見える地上の距離は、今日ま
 で大きな変化を示してきた。エジプトのベレニケ（訳注：紅海西岸の都市）の岸辺からインドまでの
 距離は、プトレマイオス王朝時代に、モンスーンの助けを借りてインド洋を横断したヒッパロスの航
 海によって、それまでの半分に縮小された。その後においても、自然の流体に人類の魂を吹き込むこ
 とによって、インド世界の岸辺は、全世界に対してどれほど近づいたことであろうか！

科学としての地理学は、同時にまた、物理学や生物学など、研究対象をしばしば地理学と共有する
 自然科学のどの分野とも異なっている。これらの分野では、先の指摘のほか、自然的諸力や諸有機
 体がそれ自体として研究され、またそれらの作用と動きに見られる内的な法則性が追求されるが、こ
 れに対して、限定された地上の世界という視点や、人類によって魂を吹き込まれた流動の担い手とい
 う観点や、流動を通じてそれらの物体や生き物にもたらされた変化という見方には欠けている。それ
 ゆえ、宇宙の構造それ自体は、ちょうど神におけると同様に、一定不変な諸関係、絶対的な観点から
 研究すべき諸関係からなると見なされている。自然の体系にしても、ソロモンやアリストテレスは、
 現在見られる多様性や豊富さに較べるとごく少数のものにしか触れていないが、それでも、その内的
 な法則や構成や現象形態は、すべての時期を通じて本質的に同一であったと見なされている。変化を
 見せるのは、個々の自然の産物の分布域や栽培域、そしてそれらの個体数だけというわけである。こ
 れに対して、地表の構造は、けっして一定不変のままに留まてはいない。地球の宇宙的側面や物理
 的側面がたとえ一定であったとしても、その歴史的側面はけっして一定ではないからである。

なぜなら、つねに一定で永続的であるものは、生物体が新しい世代によって置きかえられるように、新たな創造物によって若返るようなことがあってはならないし、また、限定された地上の存在として、化学作用や成極作用によって、その生成の当初段階においてすら、結晶体のように完成にむかって変化するようなことがあってはならない。地球について言えば、それは前者のように不断の再生を行っているわけではないし、また、後者のように風化や分解を通じて、当初もっていた形態から次第に遠ざかるわけでもない。地球は、太陽系に属する他の諸惑星に較べると、天体としては全く同一の諸関係のもとにある。しかし、それら諸惑星がわれわれにとって何ら個別的で相対的に認識しうる変化を受けていないのに対して、わが地球は、その長い歴史を通じて、機械的であれ物理的であれ人為的であれ、われわれが知覚できる地上のあらゆる諸力の全面的な影響下に置かれてきた。さらに、それら地上の諸力のさまざまな作用は、人類の歴史と深い結びつきを有している。

諸空間および諸時間と同様に、数多くの諸形態（隆起や噴火や陥没や地震や洪水などにより）、諸物質（風化や腐敗により）、諸材料（化学変化により）、地上における諸力の連関は、歴史的に変化する。きわめて峻嶒な諸形態も接近不能のままということはなく、多数の諸形態が消滅させられたり、作り変えられたり、迂回されたり、踏破されたり、切り開かれたりしてきた（自然現象による場合もあろうし、道路や運河の建設による場合もある）。また、多くの物質が、その有用性を認識され、利用され、加工され、減少し、あるいは山積みされてきた（ばた山や腐植土や泥炭層など）。多くのものは、もはや特定の場所の特別の賜物として隠されているわけではない。多種類の生物が、すっかり姿を消したり、数を減らしたり、あるいは場所を移動したりしてきた。このことは、海や陸水の化石群、栽培植物による野生植物の駆逐（たとえばエジプトやロンバルディア）、さらには内陸アジアやアメリカでの野蛮民族や文明民族による先住民族の駆逐などを見れば明らかである。われわれは、野生の鳥や獣の群れ、毛皮獣、森林などが消滅し、北極海から大型獣が、また大陸の内部から象の群れが追い出されつつあることを知っている。このようにして、かつて人類に害をもたらした荒々しい自然の諸力（機械的な諸力にせよ、生物的な諸力にせよ）は、無力なものに変えられたり、飼い馴らされたりしてきた。気候の影響力は文明の力によって克服され、熱帯世界や極地方、さらには旧世界の反対に位置する新世界でもヨーロッパ化が進んだ。いたるところで技術と栽培が、それまでの欠乏を豊饒へと変化させた。文明は、あらゆる面で自然を克服する術を人類に与えたのである。

そして、これらのことは、地的に充填された地上の諸空間のほとんどを、その相対的な諸関係において、かつての時代とはまったく異なったものに変容させてしまったのではなからうか？ 諸空間の位置は、これらのことを通じて、完全に変化してしまったのではなからうか？

民族の発展のあり方に対する自然環境の影響力は、民族の発展度が高まるにつれて、しだいに後退することが明らかである。自然の影響力は、人類史の初めの段階で、人類揺籃の地における最初の発展に対して決定的に重要な作用をおよぼした。自然環境の違いは、われわれの全く知らない時代に成立した多様な人種や、肉体的に多様な民族集団のなかに、おそらく見いだすことができるだろう。

しかし、自然の影響力はやがて衰えざるをえない。人類は、その定められた生涯のなかで、他のどの時期にもまして自然の影響力の下にある幼少時の状況とその限定性から、やがて抜け出すことにな

る。文明化された人類は、ちょうど個人が成長するときのように、自然環境や自分の住み家がおよぼす直接的な制約の束縛から、しだいしだいに脱却する。それゆえ、充填された諸空間がもつ地上での同一の位置や、同一の自然的諸関係は、すべての時代を通じて同一の影響力をおよぼすわけではない。

地球の自然がその意味を変えることがないのは、停滞的な民族に対してのみである。地球の自然は、文明の段階にあって前進したり後退したりしている民族に対しては、その意味がつねに揺れ動き、変化するものとして捉えられる。いくつかの具体例が、この成り行きを通して、このことを特定の地域空間について、また地上のすべての部分について、十分に説明してくれよう。たとえば、砂におおわれたナイル川低地の最初の住民は、その東西の隣人、すなわちリビア人と遊牧アラブ人が今日もそうであるように、砂漠の民であった。しかし、文明民族のエジプト人は、この不毛の土地を、水路の建設を通して世界で最も豊かな穀倉に変貌させた。岩石砂漠と砂砂漠という束縛から脱却し、そこは、固定的形態による流体の賢明な配分、すなわち灌漑によって、記念碑的な建造物にもっとも富んだ文化の地になったのである。その後、住民の怠惰と圧政により、オスマンの支配に至るまで、低地の一部は、テーベのように再び砂漠にもどり、あるいは肥沃なマリユート地方のように沼沢の地と化した。このように、広大な幅をもつ水平的な広がりの変化がいたるところで生じた。これによって引き起こされたのは、それ自体の空間の変化ばかりではない。隣接する諸空間もまた、遮断や接触という面で、さらには頻繁な人の流れや交易にまで至るあらゆる種類の空間充填的な流動に関して、相対的な位置の変化を被らざるをえなかったのである。

ある種の固定的な地上形態についても、局地的および広域的な影響の仕方に関して、われわれはこのような変化を認めなければならない。たとえば、西暦紀元直後の数世紀間、文明化されたヨーロッパ南部と、当時まだ文明の及んでいなかった北部ケルト・ゲルマン世界は、巨大な自然の隔壁、すなわち中部ヨーロッパ全体を東西に貫くアルプス山脈という通行不能な高山列によって分断されていた。その南方には、古代世界の文明諸国が存在したが、山脈北側の斜面はすでに北方の野蛮世界に属していた。ところが、自然地域や民族領域の間仕切りとして、自然自身の手で作られたこの隔壁は、紀元後一千年紀の後半をへて消滅してしまった。かつて人々を遮断していたこの地域は、前世紀（18世紀）には、その自然の美しさや近接性の高まりによって、全ヨーロッパから人々を引きつけるまでに至っている。かつて未開であったこの地域の内部には、西のプロバンスから東のシュタイアーマルクに至るまで、数多くの文明民族と文明国家が歴史的に形成されてきた。深い谷底やはらかな高地にも多数の人々が居住するようになり、開墾とともに森林は消滅した。すべての谷とすべての山が行き来できるようになり、重い荷物さえどの方角にも簡単に運べるようになった。ハンニバルやシーザーの時代に南北間の障壁であったこの地域は、今やあらゆる方向に対して一般的な通路をもつ地域へと変化した。ちょうど人を寄せ付けないトルキスタン・ステップの野生馬が文明世界の貴重な家畜へと飼い馴らされたように、このアルプスの地域が周囲の地域にとって以前とはまったく異なった関係をもつようになったことを、われわれは認めないわけにはいかない。この巨大な自然の形態は、諸民族に対する制約性と束縛力をますます失いつつある。物理的な自然とその壮大さがほとんど一定不変だったとするならば、まさに歴史的な要素こそが、新しい道具により、人類の魂を吹き込まれた流動により、

また文明の進歩により、諸民族が自然の束縛から抜け出すことを可能にしたのである。人類と諸民族の力は、今やますます自然の諸条件に打ち勝つようになり、それらの条件を変質させるに至っている。

同様のことを、われわれはヨーロッパの東の境界山脈であるウラルについても見ることができる。しかし、ウラルはアルプスがたどった道筋をまだ半分ほどしか進んでいない。ウラル山脈は、二つの大陸を分断する境界としての役割を一千年にわたって果たしてきたが、1世紀前のピョートル大帝の時代から、むしろヨーロッパとアジアを結ぶ通路としての役割を果たすようになった。通路としてのウラルが、ヘロドトス以来そうであったように、旧世界の東と西を分かつ隔壁としての役割を失うときが、将来おそらく来るであろう。その時期は、世界最古の歴史をもつ地域にずっと近く位置するにもかかわらず、今もって通路に乏しい峻嶒なカフカス山脈などよりも、間近なものであるように思われる。歴史的要素が、山地の物理的な性格と、世界に占めるその位置（Weltstellung）にどのような作用を及ぼすかという上述のごとき考察を、地球上のあらゆる山地について行うことによって、物理的な諸関係でもなく、また歴史的な諸関係でもない、きわめて多様な諸関係が明らかにされることであろう。そして、それこそがまさに地理学の実り豊かな領域を形作るものに他ならない。

平地や谷や山地といった諸形態とともに、砂漠やステップや大森林や湿地や沼沢地についても同様のことが言える。

陸地や海洋の個々の諸部分について述べたことは、大陸や海洋の全体についてもあてはまる。かつて海岸や海や大洋は、地球上における障害物に他ならなかった。もっとも流動的な諸形態、すなわち大気だけが海の上を飛び越すことができた。さまざまな場所の金属資源にせよ、植生にせよ、動物世界にせよ、さらには民族世界にせよ、その空間的分布がすっかり変化してしまうようになったのは、よほど後になってからのことである。それまでは、漂砂やヤシの実や流木や流水や、はたまた泡や藻などのように、ごく僅かのものだけが、風の流れと海流に運ばれて、岸辺から岸辺に移動していたにすぎない。現在では、海が昔のように陸地の諸部分を分断することはない。航海技術が成熟段階に達して以来、また、地球上で最大の面積（地表面の5分の3）を占める海の流れに人類の魂が吹き込まれ、海上交通が、すべての民族を結ぶもっとも迅速かつ容易な手段になって以来、海こそが諸民族を結びつけ、諸民族の運命を結び合わせるもっとも便利で、また一番確実な道なのである。

海上交通の発達には、大陸やすべての島々をもつ世界的な位置を、かつての時代のそれとは、まったく異なったものに变化させてしまった。

数千年来その存在すら知られていなかったセント・ヘレナの火山島が、遠方航路の中継地点として3世紀前によく発見されたのも、また、ヨーロッパからは遠く離れたこの島が、1810年代にわれわれの世界に非常に身近な島になり、ヨーロッパ各国の注視のもとに置かれたのも、海上交通の発達を抜きにしては考えられない。

ヨーロッパから喜望峰までの航海にしても、15世紀の第一人者であったポルトガルの艦隊は、そこに到達するまでに（エンリケ航海王子からバルトロメウ・ディアスやヴァスコ・ダ・ガマに至るまで）百年近い歳月を要したが、風や海流や季節に関して正確な知識がえられた今日では、地上の一地域から他地域への単なる一航海というにすぎない。すなわち、北緯50度から南緯40度にいたる2,000ドイ

ツマイル（直線距離では1,400ドイツマイル〔訳注：1ドイツマイルは約7.5km〕）のこの航路は、ほぼ決まって55～60日の航海であり、フリゲート帆船の船長は毎日約40ドイツマイルの道乗りを進むのである。したがって、アフリカの南部は、今日、ヨーロッパの北西部から僅かな日数で行けるところになった。そして、その日数たるや昔そこに到達するために要した年数をはるかに下回るのである。英仏海峡の出口から広東(カントン)までの中国航路では、往路にせよ帰路にせよ、18世紀の末になっても、幸運に恵まれて8～9か月、もしくはそれ以上の日数がまだ必要であった。地球の半分以上をめぐるこの航路を、現在では、かつての半分以下の4か月で航海できる。5か月かかることは今では稀である。内陸に位置するここベルリンにおいてさえ、10月16日付けの広東からの報告を、われわれは1832年の3月3日に入手することができた。このことは、フィリピンへの寄港を考慮するならば、帰路の航海が4か月ですんだことを意味している。過去13か年の数字を見ると、ロンドンからボンベイ方面に向かった船舶は、この航路を走破するのに平均で121日間、最長で142日間、最短で103日間の航海日数を要したにすぎない。

他のあらゆる海上航路で、今日、同様のことが見られる。ヨーロッパに対して離れ島的な位置にある北アメリカは、その欲求にぴったり合致した高速帆船を有しているが、この船は、イギリス船の航海日数より3分の1ほど少ない日数で大西洋を横断することができる。リバプール行きのニューヨーク郵船は、800ドイツマイルの航路をつねに16日たらずで走破しており、このことは毎日約50ドイツマイルずつ進むことを意味している。これに対して、ロンドン行きの船は通常はほぼ25日間かけて大西洋を横断している。これらの船舶の往来を通じて、大西洋は、事実上、幅の狭い入江か、あるいは大きな運河のようなものに変質してしまった。

それほど広くない内海や湾や入江の多くは、蒸気船の利用によって、現在では陸路よりもずっと速い海上の近道へと変化した。北部のバルト海ではこれが年間の半ばほどにすぎないが、南部の地中海やレバント地方では一年を通して海上交通が可能である。イギリスとレバント地方を地中海を通して結んだ最初の蒸気船メテオール号は、地中海各地（コルフ島3月3日付け、マルタ島3月7日付け、ジブラルタル3月10日付け）の商用書簡を、ファルマスの港に3月24日にもたらした。しかも、この船はカディスにも寄港し、そこで荷物を積み込んだのである。

エチオピア海（訳注：インド洋）でしばしば見られるように、無風で穏やかな海上では、どんなに高速の帆船もかつては静止状態を余儀なくされた。蒸気船はこの難点を克服した。かつて恐れられていた海域を、蒸気船は素早く通り過ぎることができた。

海と同様に、陸上の水である大河川も、かつて有していた長さを失いつつある。大河川の長さは、実質的に、真の長さの6分の1か7分の1程度に短縮されていることがしばしばである。また、河川交通の1方向性は、蒸気の力によって2方向への動き（すなわち川上方向への動きが川下方向への動きに付け加わった）によって取って代わられた。

ミシシッピ川の水系は、世界でも最大級の規模をもち、数千にのぼる支流を含めると流域面積は54,000ドイツ平方マイルで、ヨーロッパ全面積の約3分の1に相当する。その長さは、ミズーリ川の源流からメキシコ湾の河口まで、730ドイツマイルに達する。ちなみに、ミシシッピの本流や、オ

ハイオ川、イリノイ川などの支流は、ミズーリ川よりもずっと短い長さしかもっていない。今日、ミシシッピの水系には、合わせて300隻の蒸気船が就航している。かつて、シンシナチからピッツバーグまでオハイオ川をさかのぼる100ドイツマイル（500英マイル）の困難な船旅は、ゆうに60～70日を必要とした。今日では、この同じ区間をわずか9日間でさかのぼることができる。1811年から1831年までの20年間に、シンシナチだけで111隻の蒸気船が建造され、この水系に就航した。これらを含めて、アメリカ合衆国の西部諸河川には合計348隻が就航しているが、このうち約200隻（正確には198隻）がこの区間に集中している（1831年現在）。オハイオ川沿いに位置するケンタッキーの主要商業都市ルイスビルと、ミズーリ川とミシシッピ川の合流点に位置するセントルイスの区間（126ドイツマイル）には、つねに6隻の蒸気船が行き来していて、行きも帰りもほぼ10～11日で結んでいる。さらには、大河となったミシシッピで、セントルイスからニューオーリンズまで240ドイツマイル（1,200英マイル）の道のりを、多数の蒸気船が定期的に24日間、場合によっては18日間で行き来している。したがって、これらの地点とそれに隣接した地域は、相互に驚くほど近接した関係をもっているのである。メキシコ湾からミシガン湖やヒューロン湖に至るミシシッピ川の全水系は、河川交通によって以前とはまったく別の次元をもつことになった。急流やオハイオ川の早瀬を克服することで、蒸気船は、ニューオーリンズからピッツバーグの区間を、その就航の当初（1816年）から3週間で結んでいたが、現在では、おそらくもっと短い時間で定期的に結んでいることであろう。

大陸上を流動する自然の猛威は、かつては人類の手におえなかったが、今やこのようにして、あらゆる方向で人類の支配に服しつつある。河川の源流である内陸に向かって、すべての大陸の諸関係が移行しつつあるのも、これまで陸地上で人を寄せ付けなかった大河川に対して、人類の支配力が増大しつつあることの必然的な帰結に他ならない。

アメリカで見られたような巨大なスケールでの変容は、世界の他の諸地域ではあまり見られない。それでも、同様の変化が同様の帰結を引き起こす事例は、大小さまざまなスケールで世界のいたるところで認められる。すでに世界のそこそこで、思いも掛けなかった動きや現象が発生している。それらの動きは、目下のところ、非常にささいで局地的なものであったり、もしくは単に市場価格の問題であったり、狭い範囲だけでの現象であったりする。しかし、やがてはそれらも文明全体に影響を与えずにはいないだろう。生鮮製品の交易は、その量の大小はさておき、しだいに発展しつつある。たとえば、近年、ファルツやハイデルベルクやラインガウの果樹地域では、ライン川に蒸気船を走らせることによって、走りのぶどうやさくらんぼをロンドンにわずかな日数で出荷し始めた。インドのガンジス川でも、蒸気船がカルカッタからベナレスやアグラやデリーなど、ヒンドスタン諸州の奥地まで行き来している。風のぐあいや川の流れの状態によって、かつては最大4か月かかるのが普通だったこの区間を、現在、24馬力のコメット郵船は2～3週間で結んでいる。ベンガル湾も今は、季節にかかわりなく、ビルマの大河イラワジの河口に位置するラングーン（マルタバン湾）まで、蒸気船が定期的に行き来している。さらに、シンガポールにかけて、モンスーンの時期でさえ、マラッカ海峡は両方向に通過されている。このような中で、おおむね停滞に甘んじていた中国人のみが、広東に初めて蒸気船が出現したときに、これを「火船」と呼んで軽蔑の対象にした。しかし、外国での進歩に

対して、おそらく見せかけではあろうが、このような態度をとり続けるかぎり、中華帝国の内部における水平的な距離はいつまでも昔のままであろう。一方、中国を取り巻くオーストラリアやインドなどでは、水平的距離が従来とはまったく異なった意味をもつに至っている。人の流動を通じて、諸民族の関係が地上の諸空間にいかんにか反映するか？ また諸民族の関係がそれらの諸空間によっていかんにか規定されているかという問題は、かつての植民地化の動きや交易の進展、さらには軍事的な遠征などによって、十分によく知られている。われわれは、ここでは単に最近の目立った事例として、外交団が敵対的な民族の中で蒸気船によって自立性を維持した例を指摘するにとどめよう。イギリス公使のジョン・クロフォードは、ビルマの首都アバまでイラワジ河をさかのぼる最初の船旅において、ラングーンからアバまでの540英マイル（108ドイツマイル）を、現地の悪条件に影響されずに、蒸気船ダイアナ号を用いて20日間で走破した。このようにして、1826年の10月には、ビルマ戦争の結果として結ばれたインド交易条約を、強要したわけではないが、稀に見るスピードで締結することができたのである。

南方のオーストラリア世界にしても、今やヨーロッパとの距離は昔ほど巨大なものではない。発見されてから百年たっていないにもかかわらず、オーストラリアは驚くほどのスピードで発展をとげ、古い歴史をもち、文化も発展している北側の大陸文明圏と急速に肩を並べようとしている。オーストラリアに行くことは、たとえば、わがヨーロッパに隣接し、文明の最初の胚芽をわれわれにもたらした大陸の中央部、すなわち中央アジアに行くことに較べ、今日ずっと容易であり、また短い日数で可能である。同一の空間を、今日の船乗りたちは昔とまったく異なった日数で行き来している。北の海辺や南の海辺に、旧大陸や新大陸のあらゆる海岸線に、またすべての島嶼群にと、今日いたるところに港が存在する。これらの港はドックをもち、またそこには熟練した船乗りたちがいる。港は今や、海の生きた手足へと成長したのである。

地球の自然や地上の物理的様相は、人類の精神活動を通じて、また幾世紀にもわたる発展進化を通じて、諸民族の全生活に対して、あらゆる面で昔とはまったく異なった姿と価値をもつようになる。実際、そのような変化は、すでにそこここで認めることができる。たとえば、ヨーロッパにとって、西方世界はずっと身近なものに変化した。アメリカは、もはやヨーロッパから4～6週間で到達できる距離でしかない。他の海洋諸国についてもこれと同様のことが言える。にもかかわらず、他でも述べたように、ヨーロッパは依然として、他のあらゆる諸地域と陸上および海上を通じて容易に接触できるという点で、世界でもっとも恵まれた場所に位置している。もしパナマ地峡が切り開かれたとしたら、海を通じての接触はさらに強まり、世界に占めるヨーロッパの位置はさらに卓越したものになる。なぜなら、それが実現したあかつきには、アレクサンダー・フォン・フンボルトがすでに指摘しているように、大西洋に面するヨーロッパの文明世界、すなわち西ヨーロッパからアジア東岸までの距離が約1,500ドイツマイル、すなわち赤道の約4分の1の長さほど短縮され、両者の直接的な結びつきが実現されるだろうからである。これにより、コロンブスがかつて目指したことが実現されることになる。この探検家が「黄金半島 (aurea chersonesus)」の考えに取り憑かれていて、自分の発見した西インドを、プトレマイオスの東インドだと信じていた話しは有名だからである。

地表空間の形成は、それゆえ、その終点、その完成へと、まだ決して到達したわけではない。先史時代における変化を上回る大変化が、おそらく歴史時代にも存在するだろうことは、スエズ地峡が切り開かれ、レバント地方からオリエントへの水路が開通するという有り得なくはない事態を想定すれば十分であろう。ちなみに、大昔には、スエズの砂丘が地中海と紅海を分断していなかったこと、したがって両側の大陸はつながっていなかっただろうと考えられているのである。それでも、われわれは、ヨーロッパについてすでに見てきたように、地球上の特定の地点が、変転しがちな（進化する）地球システムのなかで一定の発展力を持ち、他の地点にない有利さを享受しうること、地上の諸関係には時計仕掛にみられるような繰り返しや静止状態は存在しないこと、さらに、地上の各地点は決して同一の発展過程をたどらないことなどを指摘してきた。沿海地域にみられる著しい発展傾向に対して、旧世界の大陸部は、全体的には発展しつつあるものの、一部の地域、特に大陸の東部で、時間的、距離的、文化的な面での逆行傾向がやや認められる。大陸では、かつての文化中心が沿海地域に移行し、内陸は外部に目を向けるようになったが、それでも多くが砂漠のなかに埋もれてしまった。中央アジアの土地は、かつてのアレクサンダー時代や、中世のカリフや十字軍の時代に較べて、明らかに大きく縮小している。昔は、交易にせよ、文化や伝統にせよ、あらゆる結びつき、あらゆる交流が陸路を通して、街道を通してのみ行われたのである。今日では、それらのほとんどが、アジアの沿岸やその近辺の地域を経由することで、海上の道を利用している。内陸は、このようにしてしばしば閉鎖的な地域に変貌した。

西インド諸島や東インド諸島、スンダ列島の島々は、今日、ヨーロッパと非常に強い結びつきを有しており、イギリスやオランダやフランスからは、あたかもヨーロッパの一部として、すなわちヨーロッパ世界の海の手足のように見なされている。その結びつきの強さは、ヨーロッパに隣接しているカフカス西南のグルジア地方よりも、ずっと大きなほどである。ヨーロッパから遠く離れているにもかかわらず、これらの島々とヨーロッパの間には絶え間なく船が行き来し、頻繁な接触が維持されている。一見遠く離れて存在するこれらの地域は、中間の海の流れに人類の魂を吹き込むことを通じて、また途中に存在する数多くの中継地点によって、たがいに近しく、密接な関係をもつ地域へと変化したのである。これに対して、自然本来の形態により結びつけられている大河流の源流地域と河口地域、たとえば今日のチグリス＝ユーフラテス水系やガンジス水系の源流地域と河口地域は、これよりもはるかに希薄な関係しかもっていない。同じように、大陸の内部で隣接している地域も、たがいに希薄な関係しかもたないことが多い。たとえば、ベンガルとチベット、ペルシアやアフガニスタンとソグディアナやカシミール、シリアと小アジアなどがその例である。また、同じことは、アルメニア、カフカス、ブハラ、中国の西部内陸、東ヨーロッパについても言える。大陸内部で相対する南東ヨーロッパと西アジアの内陸部は、たがいに境を接しているにもかかわらず、この数百年来、ほとんど完全に別々の地域と考えられてきた。このような分断をもたらした原因は、通過路がほとんど存在しないカフカスやトロスの山脈列、キルギスやトルクメンのステップ地帯、トルコ人による圧政と野蛮などであるが、さらに何にもまして、マホメットに帰依する民族、とくにトルコ人の宗教が、キリスト教徒にとって強力な隔壁となった。

歴史的要素が、地表の性格にいかに関与して来たかは、西アジア全体、あるいは繁栄した歴史をもち、楽園とうたわれたソグディアナや、かつての繁栄をしのばせる廃墟がいたるところに存在する小アジアを見ただけで、一目瞭然であろう。地理学が個々の地域特性の解明にかかわることを止め、それゆえ地表空間の歴史的な性格を考慮せずに、地表空間を、その全体的な諸関係について一般的に考察することのみに終始したのでは、この種の阻害的作用（助成的作用についても同様である）を解明することはできない。個々の地域特性の解明は、時代々々に活躍した人物に関する伝記的記述が歴史学の中でもつと同じような意味を、全体像の提示にさいして有している。それを抜きにしては、地上の空間的諸現象の多様性をある程度見通すこともできなからう。世界の国々や民族について地理学が昔から採用してきた単調で一様な記述の仕方は、世界史における同様のやり方や、人権の斉一性というかつて非常に好まれた説と同様に、内容のないものと言わねばならない。歴史的要素の考察を地理学から後退させないためには、次のような事実を思いをいたせば十分であろう。すなわち、地表空間における物理的な諸関係は、人類に対するその作用や、歴史の成り行きに与えるその影響を考慮したときに初めて、その真の姿が現れるのである。博物学者や物理学者が追求する法則は、つねに概念や定義を与えるものではあるが、事実や現象の全内容を与えるものではない。法則は、歴史的現実の単なる手がかりに過ぎないからである。

確かに、理論的に言えば、もっとも近い道筋は直線である。しかし、純数学的な概念の適用がしばしば後退せざるをえない地球の自然において、このような道筋はたいてい曲線であり、地表のきわめて多様な性格に応じて道筋が決められることになる。たとえば、ネバ川河口のクロンシュタットからカムチャツカ半島のペトロパブロフスクまでの場合、海路よりも道路距離（1,500ドイツマイル）の方がずっと短い。にもかかわらず陸路の方がまさるのは、シベリアが雪におおわれている冬の間だけのことである。また、大量輸送の場合、旧大陸あるいは新大陸の迂回をとまなうにもかかわらず、もっとも迅速かつ有利な方法は、ここではつねに海路なのである。

広大な海に囲まれた小さな島々が、かなり重要な意味をもつに至ることがある。サンドイッチ諸島（訳注：ハワイ諸島）は、その好例であろう。三つの大陸を結ぶ海の十字路口に位置するこの島々は、港の建設、船舶の建造、経済の発展（特にロシアや中国や北アメリカとの毛皮取引）、3地域（東アジア、オーストラリア、アメリカ西部）間の交易流の存在などを通じて、今や無視しえない影響力をもつに至った。このように、恵まれた位置をもち、交通上の要請に好適な自然条件を備えた一地点がある時期、広大な土地以上の意味を獲得し、短期間のうちに周辺の島々や海域に対して最大の影響力をもつに至ることは、かつてのアレキサンドリアやホルムズ、あるいはマカオやハバナ、近年ではシンガポール自由港のように、しばしば見られる現象である。他方、16世紀初頭に、世界各地の相対的な位置が突如として完全に変化したとき、あのケープ州はどうだったであろうか。ここでは、後になって初めて、交易を目的にするオランダ人によりケープ植民地がつくられた。さらに、イギリス人によって、ここが南の海の政治的／商業的な監視所へと化したのは、この20～30年のことに過ぎない。16世紀の初頭に、もし適切な選択がなされていたならば、旧世界の南の岬にあたるこの場所は、その類まれな位置により、全南半球の歴史に大きな影響を与えうる存在になっていたことであろう。

陸と海にはさまれた海岸の巨大な帯が、当時に較べるとはるかに調和的な発展をみせている現在においても、オセアニアで多分もっとも恵まれた位置をもつファン・ディーメンズ・ランド（訳注：タスマニア島）が経験した発展は、驚くほど急速なものであった。イギリスから見て、地球の裏側に相当するこの西欧化した島には、さまざまな発展の理由がある。恵まれた自然条件（港に好適な海岸、土地、降水、気候）、オーストラリア世界でもっとも恵まれた関係位置（それは他の大陸に対する位置であるとともに、海流や風系との関係からみた位置でもある）、ここで展開されたヨーロッパ人の自由な植民活動などが、まず第一に指摘できる。さらに、この島の発展が急激に進行した背景には、島数の多い地球の南半球が、北半球に較べて、発展に適した陸地にきわめて乏しいという事情がある。広大な面積をもつこの島は、その土地がヨーロッパと同じように肥沃なだけに、オーストラリア世界では特別の地位を占めているのである。航海技術の発達が発達の域に達したあかつきには、この島は、今よりもずっと大きな果実をもたらすことになる。

古代ヨーロッパの歴史は、狭く限定された（ローマ人の表現を借りると）「地上の世界（orbis terrarum）を、その舞台としていた。中世には、それが旧世界の北の端、南の端、東の端へと、しだいに拡大していった。そして近代においては、歴史を織り成す多彩な事件が、全地球スケールで展開している。それゆえ、歴史的要素は、さまざまに異なった時代に、さまざまに異なった仕方、地球の自然に作用してきた。しかも、その速度と様相は、さまざまに異なっていたのである。

人類がそれぞれの故郷に依存していた時代、すなわち主として自分自身に依存していた時代には、地球の一般的な諸条件から人類が大きな影響を受けることはほとんど有り得なかった。しかし、それだけに、それぞれの故郷の局地的な自然条件は、民族や国家の個性にきわめて強く作用した。それゆえ、当時、みずから与えられた狭い領域に立脚して文明の高みにまで到達した民族や国家は、近代の民族や国家に較べ、ずっと個性的で、かつ調和のとれた、完成した存在であった。それらは、みごとにまで明確な歴史的な性格を有していたと言える。外部からの影響をまったく受けずに、それらは、ふるさとと空と土から成長したのである。ふるさとは、その肉体のすみずみに、その血液のすべてに滲み渡っており、若々しさと栄養と力の源泉になっていた。これらの民族においては、国家のすべてが、ふるさとや郷土と関連しており、全体が一つの単位としてきわめて強い結びつきを有していた。古代のエジプト人やペルシア人、ヘブライ人、ギリシア人、イタリア人などについて、このことがあてはまる。なぜなら、これらの時代には、植民や交易や交通などといった近代的な交流手段はまだ弱いものでしかなく、外部との相互作用を通じて一般的な高水準を目指す動きは、ふるさとを基盤とする文明の発達に決して先んじるものではなかったからである。

古代の歴史において、それぞれの土地は、今日のように外部世界から到来したものを成長させていたわけではなかった。つねにその土地のものだけを、完全に成熟したものだけを育てていたのである。最高級のナツメヤシの実、リビアのヤシの木の下で見いだすことができた、高く聳える杉の木は、ヨルダンの泉のほとりとレバノンで生い茂った。ギリシアを象徴するプラタナスは、その壮麗な樹冠を、ヨーロッパ側とアジア側両方の島々の海辺に広げ、松はその扇状の樹冠をイタリアの土地の上に広げたのである。

当時、旧世界を構成していた三つの大陸は空間的にきわめて接近しており、このことが、内部の多様性を通じて古代世界史の舞台を引き立てる役割を果たした。当時はまだ、一部の要素だけが大きな意味をもっていたと言える。しかし、海を通じて世界が結ばれた現在では、空間的接近という一面的な関係は、世界全体に対するその卓越的な意義をすでに失ってしまった。国々や民族の相対的な位置に関する空間的諸関係を正しく判断するためには、もはや陸地だけではなく、海とその流動を考慮にいれねばならないのである。

それゆえ、地上の自然は、古代世界と近代世界で、まったく異なっていると言わねばならない。古代や中世の世界に対して、われわれは、「地上の世界 (orbis terrarum)」や、あるいはそれを外延的に拡大した空間を、実際の距離や面積にしたがって数学的に正確に描けばよい。ところが、近代の世界については、これらの空間的要素に関する正確な記述のほかに、時間的要素を正確に表現する手段を同時に見つける必要がある。物理的な流動にせよ、人類の魂が吹き込まれた流動にせよ、それぞれの地域が、現実にとどのくらいの時間で到達できるのか、また横断できるのか？あるいは、地域間に真の意味での交流が成立したのは何時のことであるのか？ これらを正確に表現する必要がある。すなわち、われわれは、空間と時間の2要素を組み合わせ、一つの全体像を作り上げねばならない。そのために、われわれは、たとえば透明な世界地図を何枚も重ね合わせて互いにずらしてみたり、特定の地点を移動させてみたり、さまざまな工夫をする必要がある。

歴史的にみて、ある空間は縮小し、他の空間は拡大し、高度の高いところは低下し、交通路は増加する。ヨーロッパの場合、少なくともその大部分の地域では、これらの関係がほぼ一定であろう。ここでは、昔も今も、その時間的／空間的諸関係はほとんど変わっていない。これに対して、アジアでは、南側の海岸地帯がきわめて大幅に相互の間隔を短縮し、高い障壁のもとであえいでいる中央アジアを、その海岸線で取り囲んでいる。かくして、地球上のほとんど全ての地域で、これら二つの関係の不一致が、生命をもたない地表の諸形態に奇妙な歪みをもたらしている。ここで、このような歪みや変位について触れたのは、両者を対比することで、われわれの認識世界が、表面的事実の偽りの見せかけにより、いかに歪められているかが明瞭に示されるからである。われわれが、地球上の諸関係の中に、生命あるものの代わりに、生命のないものだけを認識し、地理学とともに歴史的要素を考慮しないならば、すなわち、歴史的要素をまったく無視したり、もしくは、そここの地理学者に見られるように、歴史を不可欠の要素として地理学の体系内に取り入れる代わりに、単なる思いつきで、単に部分的か、あるいは場当りのにしか考慮しないならば、このような歪みを避けることはできない。

もし、ケプラーの法則やニュートンの万有引力を考慮せず、太陽からの距離や惑星間の距離がつねに一定だと考える人がいたならば、その人の太陽系に関する捉え方は大きく誤っていると言わねばならない。惑星軌道の摂動、すなわち惑星の正確な公転時間と空間にみられる調和的なシステムは、これらの法則によって規定されているからである。惑星の軌道が万有引力によって規定されているのと同様に、わが地球のシステムにおいても、歴史的に充填された時間が、引力や斥力によって地表の諸空間の「摂動」と機能をまさに規定しているのである。

固有の生命が生活を営んでいる地球、その歪んでいる実像を、豊かな内容をもつ生きた像として目

にみえる形に敢えて表現したとき、それが単にその数学的な側面となり、生命の欠落した地形図になるという事実が、今日でさえほとんど理解されていない。今日のさまざまな出版物においても、このような事実は、ほとんど意識されていないのである。

以上に述べてきたことを通じて、歴史の単に場当り的な混入と、地理学に必然的に含まれるものとしての歴史的要素を、明確に区別することができたように思う。後者は、現象に不可分に関与する要因として、また単なる飾りではなく、不可分の構成要素として立ち現れるのである。

また同時に、次のことを示すことができたように思う。すなわち、地理学の体系が存在すること、その考察対象については、生命をもつあらゆる有機体と同じく、部分の把握は生きた全体に立脚して初めて可能なこと、全体を抜きにした部分の考察は不完全であり、一面的かつ非科学的であること、などである。

地球全体を構成する不可分の一部として、部分地域空間を科学的に考察することは、それが自然的なものであれ、民族的なものであれ、倫理／政治的なものであれ、いずれも特殊地理学の課題であろう。われわれは、まだこの分野を十分に発展させていない。これら一般的記述と特殊的記述の両面に基づくことで初めて、国家の地理学は真に科学的な考察を展開できるのである。

Geographical Ideas of Carl Ritter

Akira TEZUKA

The main purpose of this paper is to present the geographical ideas of Carl Ritter by his own writings. Unfortunately, the translation of his texts is completely lacking in our country. To make up for this great blank, two fundamental essays concerning the nature of geography (i. e., the opening several pages of *Einleitung zu dem Versuche einer allgemeinen vergleichenden Geographie*, which is the introductory chapter of his famous *Erdkunde*, and *Über das historische Element in der geographischen Wissenschaft*, his most famous article) were translated into Japanese and annexed at the end of the paper. For the better understanding of his texts, the life and works of Carl Ritter are examined briefly in the first half of the paper.

From the beginning of the nineteenth century, Ritter has been regarded as the founder of modern 'new geography', which replaced an old 'handbook (Compendium to use a Ritter's word) geography'. His concept of geographical science was so influential in the first half of the nineteenth century that the evaluation of Ritter has been, in many cases, a main diverging point of opinions in the methodological discussions of later geographers. But, in spite of his fame and influence, Ritter becomes now almost inaccessible, especially for non-German geographers.

The crabbed style of his German is an important reason to make his works inaccessible even to German geographers. In addition to that, the notorious images of his theology and

teleology, emphasized by O. Peschel and A. Hettner among others, hinder present-day geographers from taking an immediate interest in his geographical ideas. At the same time, however, many leading geographers of the world stress frequently a great significance of Ritter's conception even for present and future directions of geography. The evaluation of his geographical ideas still remains unsettled. We must always listen directly to the words of Carl Ritter.